夜を想うときは・・・

空野妃紫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夜を想うときは・・・

【Ｎコード】
Ｎ８００６Ｃ

【作者名】
空野妃紫

【あらすじ】
龍輝の恋のあいては「やよ」という女の子。やよは可愛くてちょっと普通とはかわっている。それは龍輝にとっては些細なことで。やよは幽霊だったのだ。祖父の屋敷で僕とやよはかけがえのない時間をすごしていく。でも、このままではいられなくて・・・命ある者と命を失った者の許されない恋の行方は。

1

この世ではじめて欲しいものができた。それは、一夏がみせた奇跡だった。

僕は両親が四〇歳の時に生まれた子で、両親や祖父たちは僕が望む前に何でもあたえてくれた。そのことに疑問をもったこともなかったし、何かを切に望んだことなんてなかった。でも、祖父が死んで一年目の夏、儚い夜空に僕はみいられた。

母方の祖父が死んで祖母はひとりになった。その祖母をひきとろうと言ったのは父だった。父の両親はもうすでに他界していて、母をものすごく愛していた父は当然のように母の両親も愛していた。孫の僕が言うのもなんだが母の両親は温和でいい人だと思う。祖父祖母の過ごしてきた家は売りにだされそうになったが、父が「思い出がたくさんあるんだ、うちの別荘としてつかわないか」と提案し、晴れて二人の家は別荘という肩書きでのこされた。

中学二年の夏休み、龍輝は大好きだった祖父をしのんで別荘として残された祖父たちの家に一人できていた。母親や祖母は一人で一ヶ月も過ごすことをしんそこ心配し猛反対をしたが、父が加勢してくれたおかげでなんとか一人の夏休みを過ごすことができている。大好きだった祖父が突然いなくなってしまった虚無感をうめたかったのかもしれない。祖父の暮らしていた家にいるとまだ祖父の気配があちらこちらにのこっているような気がして、そのことに安心と寂しさをおぼえる。

龍輝は朝はやく起きるとよく祖父とした釣りをして一日を過ごした。おそく起きた日は畳を拭いたり窓を拭いたりして過ごす。祖父の家はとてつもない田舎で山と川があり、川には魚が優雅に泳いでいて釣ると祖父はよく焼いて食べさせてくれた。

今日もうなるような暑さだったがクーラーはつけない。祖父がきらいだったのだ。龍輝がクーラーをつけて涼んでいると「体に悪い」

と言ってよく消された。だから、この夏はなるべくクーラーなしで過ごそうと決めていた。といっても川が近くにあり山の中だと都心よりはだいぶんと涼しい。しかし、今日は特別に暑かった。三匹釣り上げたところで龍輝は川の中へと飛び込んだ。地下水のように冷たい澄んだ水が龍輝の火照った体から熱をうばっていく。

「はぁ～気持ちいい」

龍輝は水面から勢いよく顔をだしてさけんだ。そして、木の葉が浮いているように泳ぐ。それから、今晩の献立を考えはじめた。龍輝は料理が得意だ。母が「母さんが死んで料理もできなくてうえじにしたらどうするの」と言って小さい時からしこまれた。昨日はキュウリの酢の物に天ぷらをして食べた。自画自賛になるがかなりのできだったと思う。衣はサックと揚がっていたし、酢の加減も調度よかった。

（今日はハンバーグが食べたいかも）

たしか買いおきしてあったミンチが冷凍庫にはいっていたはずだ。あとはサラダと冷たいスープでもつけておけば完璧。龍輝はそこまで考えると川からでて家にかえった。冷凍されてカチンコチンのミンチを解凍するために。

家にかえるとケイタイの着信音が龍輝のかえりをまっていた。龍輝は慌ててケイタイへとかけよる。誰がかけてきたかはもうわかっているので画面も見ずにでる。たぶん母か祖母だろう。毎日かけてくるからいい加減に鬱陶しくなってきていた。

「はい、もしもし」

無愛想に電話のむこうの相手に声をかける。

「龍輝、かわりない？」

母の声とお馴染みのセリフにげんなりしながら龍輝は言った。オレってそんなに頼りない。台所のシンクにもたれながら思う。

「なんにも変わりなんてないよ。毎日かけてこなくたって大丈夫だから」

「だって心配でしょう」

「もう一週間たつんだよ。慣れたから大丈夫だって」
そう言うと龍輝はさっさとケイタイを切ってしまった。そして、冷蔵庫を開けて食材をチェックすると、晩飯の準備にとりかかる。材料は全部そろっている。これなら思い描いたとおりの献立にすることができる。想像どおりの献立が現実になることに龍輝はワクワクしながら作業にとりかかる。
十二時を過ぎて布団に潜りこんだ龍輝は格子状の天井と四角い電気の傘を見あげて幼い時の失態を思いだした。なかなか寝ない龍輝に祖父は怖い話しをしたのだ。ちかくに流れる川には女の子の霊が住みついていて悪い子がいると地獄へ連れて行ってしまうという話しだった。幼かった龍輝はとうぜん怖くて結局よけいに寝られなくなった。やっとの思いで寝むれたと思ったら、今度はトイレに行きたくなって目を覚ましてしまった。
（トイレに行くのが怖くてじいちゃんとばあちゃんを起こそうとしても起きないし、結局じいちゃんの布団でしたんだよな）
懐かしいやら恥ずかしいやらなんだか複雑な思いで龍輝は笑いながら眠りについた。

龍輝は大きな欠伸を思いっきり遠慮なくする。昨日は十二時過ぎに寝たのに今日おきたのはなんと四時半。二度寝すればよかったのだがなんだか眠れず、ごろごろと布団の上でだるい体を遊ばせていた。枕元に置かれた目覚まし時計を手にとる。四角い枠の中にはデジタルで６：３８と表示されていた。後、二二分でセットしたアラームが鳴る。龍輝は意をけっして布団から起きあがった。ボサボサな頭をかきながら洗面所へむかう。祖父の家の水道はすべて地下水で氷水のような冷たい水が龍輝の頭をいっきに目覚めさせる。
スッキリした顔と頭で龍輝は朝飯の準備にとりかかる。龍輝は空腹になると腹が痛くなってしまうのできちんと三食かかすことなく食べるのだ。トーストとオムレツ、コーヒーをテーブルにならべると手をあわせる。

「いただきます」
家ではしないこの行為をきちんとしてからカップに口をつける。熱いコーヒーを注意深く口にながしこむとコーヒーの香りと苦味が口のなかに広がった。小学生の時には牛乳だったが今はコーヒーが朝のともになっている。「大人になったなあ」と祖父にからかわれたこともあった。
（少し苦かった）
濃くつくりすぎてしまったコーヒーに少し牛乳をくわえる。カップの中で乳白色の牛乳が渦をまいている。ジャムをぬるためにもってきていたスプーンでかき混ぜてさいど口をつける。
今度はほろ苦い味が口に広がり舌をコーヒーのうま味が支配した。
食事をおえると龍輝は食器を流しにはいれて洗う。几帳面な母に似たのか食べおえた食器をきちんとかたづけるまで龍輝の食事は終了しない。朝食をすませてくつろいでテレビを見ていたら、まわしておいた洗濯機が呼ぶ。ピピ、ピピと呼んでいる洗濯機のふたを開け、昨日の分の洗濯物をとりだした。庭にでて物干し竿にズボン、パンツ、Tシャツにバスタオル一枚をとおしていく。寝る時は男らしくパンツ一枚だからほかに干す物はなかった。空を見上げると自分ではけっしてだせないだろう真っ青で鮮やかな夏の空が目いっぱい広がっている。今日も快晴と満足気に龍輝は両手を空に伸ばした。
昼すぎになると龍輝は釣竿をもって川へむかった。釣りを楽しむためだ。テレビゲームを暇つぶしにもってきているが、川にいるほうが家にいるよりずっと涼しい。流れの穏やかなポイントをめざして龍輝は竿をしならせ勢いよく餌のついた針を投げいれた。そして石をスタンドがわりにして竿をたてる。大きな舞台のようになっている岩の上に寝転んだ。目の前には大空が白い雲とともに流れていく。
夏の日差しと水の流れる心地よい音、川で冷やされた涼しい風が龍輝の肌にふれていく。龍輝はそれらをより深く感じるために目を閉じる。視覚がなくなりそのほかの五感がとぎ澄まされていく。ゆ

っくりと流れる時間に日常ではない非日常の世界に落とされたような気になった。
自然と一体になっているような感覚を味わっていた龍輝の耳に水の跳ねる音が響いた。龍輝は目を開けて起きあがる。川を見たが誰もいない。川には魚がいるのだから水の跳ねる音が聞こえても不思議ではない。しかし、妙に気になる。頭にクエスチョンが浮かんだが、竿がぐいぐいと引っ張られているのを見てあっというまに吹き飛んだ。魚との駆け引きに一気に意識がもっていかれる。数分後、魚との駆け引きに勝った龍輝の手には誇らしげにニゴイが捕まっていた。この川で釣れるものは食べられる。今晩の食卓に並ぶことのきまったニゴイをバケツに入れてさいど竿を川に投げはいれた。

ここにきてから二週間がたとうとしていた。あの不思議な水音はあれから二回ほど聞いている。そしてきまってあたりに不審な点はなく静まりかえっているのだ。龍輝はどこか引っかかるのもを感じながらも気にしないようにしていた。
龍輝は岩棚から豪快にダイブする。岩棚のしたは足がつかないほど深くなっているから二メートル近くある高さから飛び込んでも余裕だ。ぶはぁっと息を吐きだして顔をだす。魚が逃げていく姿を見つけると龍輝は追うように頭から潜水する。両目をしっかりと開けたまま深い底を目指して泳いでいった。龍輝はスイミングスクールにかよっていたことがあり、泳ぎは得意でひととおり泳げる。
透きとおった水は太陽の日差しを屈折させて底に揺らめく模様をうつしだしている。きれいな模様が龍輝の体にも映しだされて優雅に泳いでいる魚たちとおなじようになる。はいった時はびっくりするほど冷たい水は体に馴染んで今は心地よいくらいだ。魚を追いかけていた龍輝は息が苦しくなって水面を目指した。龍輝には魚と違いエラ呼吸ができない。しかたなく水から顔をだす。
髪についた水を獣のように振り落とす。あたりに放射状に広がって水滴は流れる川と再びひとつになる。顔の水滴をぬぐって目をあ

けた。緑生い茂る木の一枝が不自然にざわついたような気がした。不審に思って龍輝は木の枝に目をこらしたがなんとなかった。

（最近、こんなことばかりだ）

はじめのうちは鳥や鹿などの動物たちがとおったりしたのだろうと思っていたが、最近はどうも違う気がしてならない。動物たちの気配とは少し違うような気がするのだ。根拠のない思考は思いのほか龍輝の心に影をおとした。気になってしかたないのだ。

龍輝は布団を敷くとテレビをつける。画面に顔をむける。しかし、龍輝の心は別のところにあった。あの不思議な現象について考えていたのだ。あれが起こるのはきまって川のちかくか川の中で物音はするのに、音の先にはきまって何もない。考えていると急に祖父のあの話しが頭をよぎった。

（まさか・・・）

龍輝は慌てて否定する。幽霊なんて非科学的なもの存在するわけがないというのが龍輝の考えだ。第一、幽霊が存在するならまっさきに祖父の幽霊が自分のもとに現れてもおかしくはない。しかし、祖父の幽霊を見たことがないのだから龍輝は幽霊が存在しない説に確信をもっている。

（でも、霊って昼にでるものかな？）

へんな疑問が頭に浮かぶ。ふつう肝試しは夜にやるものだ。その理由はたぶん幽霊は昼にはでてこないからだろう。それか、雰囲気がでるからかどうかはわからないが、あまり昼に幽霊がでたなんて話しは聞かない。でも、夏の夜の定番は幽霊だから昼間では幽霊もやる気が出ないんじゃないだろうか。そこまで考えて急に龍輝は馬鹿らしくなった。

（死んだら夜行性にでもなるのかよ）

蛍光灯のひもを引っ張る。今日は飯を作る気になれなくてお茶漬けですませた。少しばかり物足りないような気がするが、龍輝は気にしないようにして、敷いておいた布団の上にねっころがる。思考をストップさせるために瞼を閉じる。目をつぶったままリモコンを

探りテレビをけした。静まりかえった家の気配に龍輝の思いとは裏腹なことが頭のなかで起きている。それでも、気にしないように極めて努力する。眠りつくようにがんばってみた。

（だめだ。気になって寝むれない）

観念した龍輝は勢いよく起きあがりけした電気をつける。デジタルの目覚まし時計を手にとると２：１２をしめしていた。かなりの時間がんばっていたんだなと妙に関心してしまった。たしか、二時前後は丑の刻とか言って魔が強まる時間だと聞いたことがある。つまり幽霊がいるとしたら一日のうちでもっとも本領発揮のできる時間だ。

（川にいってみようかな）

頭に浮かんだ時にはもう腰が布団から離れていた。半ズボンとタンクトップを素早く着ると家の戸締りだけして外へでた。こんな田舎でわざわざ戸締りをする必要はないような気がするが、家にいた時の癖で戸締りをしておかないと落ち着かない。

あたりは水の音だけをのこして静まりかえっていた。たまにとおる風が木々のざわめきを連れてくる以外、音はないように感じる。おもくのっしりとした闇が龍輝の体にのしかかってくる。龍輝は耐えられなくて空を見た。地上とはちがい満天の輝きと真っ白い月が闇のなかで輝いて幻想的な光景をつくりだしている。龍輝はその空の住人たちに勇気づけられてもういちど地上の闇夜とむきあった。

（あれは何？）

龍輝の目に飛びこんできたのは蛍の光りと同じような光りをはなつ三つの光りの玉。光りの玉に囲まれて鮮やかな青い着物をきた子が川のうえを舞うように歩いている。たぶん女の子だと思う。龍輝は考えるよりも先に川のなかへはいっていった。そして、彼女を追いかけるように彼女の浮かんでいた場所へ泳ぎだす。やっとの思いで近づいたと思ったら、彼女は龍輝から逃げるようにふわりと軽やかに飛んだ。

「待って！」

龍輝は必死に彼女の着物の裾を捕まえようと手を伸ばしたが、あと数センチ手がとどかない。彼女は空の中でくるりと半回転すると龍輝の顔を見た。龍輝と彼女の目線が混ざりあう、二人はそのままお互いの顔を見つめた。彼女の目には龍輝の顔がはっきりと映しだされて目をそらせない。彼女の顔は色白くでもどこか健康的な印象の白で大きな瞳には丸々とした黒目がすいこむこうなあやしさを秘めている。彼女の目に吸い込まれていくような不思議な感じが龍輝を支配する。

「あなた名前は？」

彼女はしっかりとした声で龍輝にたずねてきた。龍輝は彼女のその声にときはなたれてとまった時間が動きだす。龍輝は慌てて答えるがどこか声が上の空になってしまう。

「僕は龍輝・・・・・君は？」

彼女は奇妙なものを見るような目で龍輝を見ていた。龍輝は不意に自分がどんな目で彼女を見ているのか気になったが、龍輝にはたしかめるすべがない。

「あなた怖くないの？私、幽霊なのだけど・・・・・」

ああ幽霊かとひとごとのように龍輝は思う。祖父の幽霊以外こわいはずなのに龍輝は怖さや恐怖などはいっさい感じなかった。

「怖くないよ。何でかわからないけど」

「かわった人ね。私はやよ」

やよと名のった女の子は柔らかに微笑むと羽根のようにふんわり龍輝のもとへ降りてくる。龍輝は宝物を見つけた子どものように無邪気に笑うとやよに手を差し伸べて言う。

「やよ、僕は龍輝これからよろしく」

龍輝の意外な行動にやよは黒目をより大きくしたかと思うとぷっと吹きだして笑いだしてしまった。あとでやよに聞いたらだって、幽霊に手を差し伸べて「よろしく」ってよく考えなくてもおかしいでしょ、と言っていた。やよは何とか笑いをおさえると涙がたまっている目を人さし指でぬぐう。

「龍輝はかわっている」
龍輝はやよが何を言っているのかわからなくて少し考えるとためらいながら聞いてみる。
「幽霊にはさわれないの？」
やよはまた笑いだしてしまった。
これがやよとの不思議な出会いだった。幽霊にふれられるかどうかその時はやよは教えてくれなかったけど、僕たちは夜の闇が薄くなるまで二人でいて話しをした。やよと僕とのあいだには人が一人ははいれそうなスペースがあったけど、僕はちっとも気にしなかった。無理にふれようとも話しを続けようともしなかった。話題があれば話しはじめて、なくなれば二人でおんなじ夜空を見た。
僕は今でもこの出会いに感謝している。やよとの出会いを後悔なんてできるはずがないんだ。やよとの時間はほんとうに優しくて心地いい時間だったから。最後の時ですら僕はあの瞬間を悔やんだりはしなかった。

昨夜はやよと一晩中いっしょにいた。朝日が顔をだす少しまえにやよはどこかへきえてしまった。やっぱり、昼に幽霊は行動できないのだろうか。やよがきえて朝日が僕の顔を照らすとなんだか昨日の夜のことは幻なのか現実なのかわからなくなった。
朝ご飯も食べずに涼しい風をうけながら昨晩分の睡眠をとる。体は睡眠をひたすら追いかけてぴくりとも動かない。ただ、眠ることだけを脳は命令しているようだ。時間の流れもわからなければ音も聞こえない。仮死状態の体はいったい、いつまでこの状態を保ったままなのだろうか。不意に遠いところで僕の名を呼ぶ声に気づく。
「龍輝」
名を呼ばれて脳裏に浮かんだのは大きな黒い瞳。龍輝は急速に意識を呼び起こしていく。目を覚ませばやよの背中が僕を呼んでいた。僕はやよの顔が見たくて一生懸命に目を開けようと奮闘しているのにやよは背中をむけたままだ。

「やよ、こっちを向いて」
寝言のように呟いて右手を彷徨わす。そんな、僕にやよはか細い声で何か言っている。「何？」と聞き返した僕にやよは今度は聞きとれるように言う。
「服をきて」
僕はやよの言葉が理解できない。たしかにパンツ一枚で寝ていたが、そこまで恥ずかしがる必要はないのではないだろうか。パンツといってもボクサーを少し長くしたような感じのものだし、あまり水着とかわらないと思うんだけれど。僕は寝る時に脱いだ服をのろのろとあつめてすべて身につけた。
「もう、いいよ」
やよにむかって言った。やよはためらいながらゆっくり振りむいた。やよの顔に僕は軽く吹きだしてしまう。だって、やよのやつ顔をサルみたいに赤くしてすごく困った顔してるんだ。そんな僕に真っ赤な顔のまま睨みつけてくるけど、ちっとも怖くない。逆にかわいいくらいだ。いつまでも笑っている僕にやよはふくれた顔で言う。
「もういい、帰る」
「あ、ごめん、もう笑わない」
でていこうとしているやよに慌てて両手をあわせて言った。目を硬くつぶって頭をさげて懸命に謝る。何度か謝罪の言葉を言って恐る恐るかた目を開けてやよのご機嫌をうかがう。「ぷっ」と空気が抜ける音がした。続けてやよの笑い声が聞こえる。僕は「え？」と思ってやよを見た。さっきの不機嫌はどこへやら上機嫌で笑っているやよの顔があった。
（何を笑っているんだろう）
そんな僕の疑問を見透かしたようにやよは少しおさまったところで僕にからかうように言う。
「龍輝、かわいい」
「え？」
「かわいい、龍輝はかわいい」

今度は僕がサルになるばんだ。僕は言われ慣れてないキーワードに過剰にはんのうして、かってに顔が赤くなってしまった。そんな僕を見てやよはよけいにカワイイを連発させる。僕はあまりの恥ずかしさにいたたまれなくて慌てて台所に非難した。その反応がやよによけいにからかわれる原因となってしまってもかまわない。とにかく、顔がもとにもどるまでやよのそばから離れたかった。

冷蔵庫から牛乳をとりだすとパックのまま口をつける。真っ赤な顔を冷やすように口に牛乳をふくんでゆく。冷えた牛乳の冷たさに顔の熱はいつのまにかおさまっていた。それでも、居心地が悪くてパンをとりだしてバターもジャムもぬらずにかぶりついた。何度か口に運ぶと牛乳を流しこんでやっと顔だけじゃなく心も落ちつく。落ちついたらやよがどうしているのか気になって、やよの名を呼んだ。

「龍輝、落ちついた」

まだ少しくすくす笑っているやよがたずねてきた。完全に平静をとりもどした僕は楽しそうなやよを無視してコップに麦茶をそそいでやよのまえにだした。やよはきょとん、として、麦茶のはいったコップを見つめている。

「飲まないの」

龍輝はやよが手をつけないから不思議に思って聞いてみる。やよはまた、笑いだした。でも、今度はからかうような感じではなくなんて言うんだろう。そう、嫌じゃない感じだったんだ。「変わってる」と言って嬉しそうに笑う彼女に思わず目を細めて僕は彼女が笑いおわるのを見ていた。

いつものように川で火の玉達と遊んでいると、中学生ぐらいの男の子が川岸に突然あらわれて自分を見ていた。幽霊を見て怖がらない人なんていないと思っていたから姿を消そうとしたらその少年は川に飛びこんできたのだ。びっくりして飛んでいこうとしたら呼びとめられた。驚いた気持ちとどうじに好奇心が芽生える。男の子の

顔は優しそうな感じで好感がもてた。そして何より幽霊に名前を聞いきて、しかも「よろしく」と言ったかわったところがすごく気にいった。その意外性がなんだか気になったのかもしれない。だから、朝になってもう一度、龍輝をのぞきにきたらほとんど裸で寝ていて、恥ずかしさと驚きでうろたえてしまった。何年ぶりにうろたえたのかはわからないけどほんとうにうろたえたのだ。

龍輝は麦茶をだしてくれて飲むようにすすめてきた。何をしてくれたのか一瞬わからなくて動きがとまってしまった。ご先祖様へお供え物をする人はいても見ず知らずの幽霊にお茶をすすめる人はいない。しかも、茶菓子までだしてくれたのだ。

「龍輝はへんな人ね。おもしろいともいうかしら」

私はお茶のおかれた席に座るとそう言った。龍輝は意味がわからない顔をして自分のコップにお茶をそそぐとむかいあって座る。

「あまり笑いをとったことはないけど」

また私の顔の筋肉がにこにこと動く。長い間、一人でいたからあまり笑うこともなかった。とうぜん怒ることもない。穏やかな時間だけが空虚に過ぎていくだけ、川の流れのように時間だけが流れていくだけの時を過ごしていた。死んだとうしょは若くして命を失ったその事実が悲しくて寂しくて涙を流していたけれど、それもほんの一瞬だけで長いあいだ穏やかな時間だけが流れていた。穏やかに生まれかわる時だけをまっていた。

「それより飲まないの。それとも飲めないの」

「いただくわ」

カップを両手でつつみこむようにしてもつとそっと口につける。一口だけこくんと飲みこんだ。龍輝の不思議そうな視線を感じるとわざとしかめ面をつくってとがめるように言う。

「あまり見ないで、失礼よ」

「あ、ごめん」

「で、感想は」

ほんとうに申し訳なさそうにしている龍輝を見ておかしくなった。

そして、幽霊のお茶タイムの感想を聞いた。龍輝は少し考えてから真面目な顔で答える。
「不思議な感じでおもしろい」
「そう、じゃあ今度はカステーラを食べてあげる」
龍輝がだしてくれたカステラにはきちんとフォークがつけられていて、それを使って一口だいに切ると口にいれた。甘い味とカステラの柔らかさが口の中を支配して美味しい。龍輝の視線を気にしながらもうひとくち口に運ぶ本当なら高級品のはずのカステーラも今では庶民でも口にできる物になったらしい。
「どう、おもしろい」
「うん。物体は残っているのにそれでも食べるシーンはきちんと見えて、すごく不思議な感じ」
「気持ちをいただいているのよ」
「気持ち。市販で買ってきたやつだから機械がつくってると思うよ」
「ちがうわ、だしてくれた龍輝の気持ちをいただいたのよ」
龍輝は理解できたのかできていないのかよくわからない返事をかえすと自分もカステラをほうばる。龍輝はあっとゆうまに食べてしまった。自分が生きていた時にもカステラはあって美味しかった。死んでから食べてもやっぱり美味しいものはかわらないのだなと思い嬉しくなる。やよの家は由緒正しい家柄で自分はねっからのお嬢様だった。だから庶民にはなかなか手のだせないカステラもよく食べたし、大好物のひとつだった。あの頃は南蛮ものが流行っていた。でも同時にそれらは高級なものだったのだ。
「いいな」
龍輝の呟きが不思議で思わず素直に聞き返す。
「何が？」
「だって、気持ちをいただくってことは精神的に満たされる感じだろ。物理的にあるとなんだか空腹感を満たすだけって感じかするだろ」
そんなこと考えたことなんてなかった。その不思議な観点の指摘

にやよはなぜだか嬉しくなる。嬉しい気持ちを追いかけて今度は温かな気持ちが心のなかに住みついた感じがした。確かに、こんな風に咀嚼をすれば人の好意をじかに感じられる。実際よい感情のものは食欲そそがれるし、逆に悪いものははっきり言って食べたくない。

「はじめてよ。そんなこと言った人」

「そう、でもそう思わない。人の気持ちがじかに感じるのっていいよね」

「そうね。悪意とかは嫌だけど、好意だと無条件でうれしくなるものね」

「あ、そうか。悪意もあるよね。いいことばかり考えてた・・・ごめん」

今にも手をポンと叩きそうな感じで龍輝は気づくと言いながらまた悪いことをしたような顔になって謝ってきた。

「龍輝が謝ることではないわ。それに、龍輝の考えかたすごく素敵」

龍輝は素敵と言われて目線をそらして恥ずかしそうに頬をかいている。まだ、龍輝と会ってから一日もたっていないけれど龍輝のそばは落ちつく。このみじかいあいだに知った龍輝は、かわいい、おもしろい、優しくてへんな人。

「ずっとあそこにいたの？」

「そうよ。あの川にずっといたのよ」

「死んでからずっと？退屈じゃなかった？」

やよはその言葉について少し考える。退屈ではなかったと思う。はじめは悲しくてもそれを過ぎれば家に縛られない自由さに気持ちの枷がはずれたようで、生きている時に感じていた息苦しさがなくなったように感じていたから。

「そうだ。町にいかない？なるべくはやく家のことかたづけるから、そしたら町にいこう」

龍輝はそう言うとやよの返事も聞かずにたちさってしまった。台所にのこされたやよは町にいくという言葉が何度も頭をめぐりまわっている。まわればまわるほどその言葉の素敵さがわかって頬がゆ

るむ。カステラが一般化された時代はもっとたくさんのことが変わっているに違いない。龍輝の家のなかにだってたくさん見たことのない物があって楽しいのに、町にいけばどんなものがあるのか想像もつかない。高鳴る胸の音をやよは感じながらそれを伝えたくて龍輝のあとを追いかけた。

龍輝はTシャツにGパン姿のラフな格好だ。Gパンのポッケトには携帯と財布をいれた。やよは僕のとなりで歩いていて、こうして見ていると幽霊じゃなく普通の女の子のようだった。カップルで歩いている人を見て、自分たちがしていることもデートのような気になってきた。でも、すぐに否定する。いくら女の子でも幽霊となんてデートじゃない。だいたい、デートは好きな子とするものだよな。やよはお嬢様だけあってみのこなしも優雅で目を少しふせるだけで憂いをおびた気品ある表情をみせる。でも、お日さまのような顔で笑ったり子供のように拗ねたりクルクル、表情をかえたりする。みぢかにいないタイプの女の子だ。

バスと電車で移動に一時間ちょっとをついやし、ショッピングセンターやオシャレなお店がたちならぶ大通りをぶらぶらと歩きまわる。バスや電車で移動している時も駆け抜けるようにかわっていく町や雰囲気にやよは終始、興奮気味で子供のように窓の外の店やマンション、街灯や道行く人のファッションを見ていた。

「龍輝、あそこはなに？」

やよが指さしたさきにあったのは、UFOキャッチとプリクラが店のまえにならべられたゲームセンターだった。入り口の自動ドアのまえには電池で動くアライグマのぬいぐるみがよちよちと歩いていた。

「ゲーセン。やよ、いきたい？」

「うん。・・・・・はやく、龍輝」

返事とともにゲームセンターに駆けだしているやよはゲームセンターのまえで僕をせかしている。店内にはうるさいほどのBGMが

流れているがやよは気にしないでいろいろなゲーム機を見ていた。やよが興味深げに見ていたものは一昔まえに流行った。ダンスレボリューション、通称ダンレボだ。僕は嫌な予感がして、さっさとたちさろうとする。

「どうやるの？」

「画面に矢印がでてきて下にある矢印をリズムにあわせてふむんだよ」

「ふ～ん。ねぇ、やって見せて」

僕は言葉につまった。だって、僕はまったくリズム感がないんだ。流行っていた時だって友達に無理やりやらされて、いい笑いものにされた。

「だめ」

苦い思い出を一緒に吐きだすようにやよに告げるとやよは納得いかない顔をしてやるようにすすめてくる。

「絶対にイヤだ」

「一緒にすればいいでしょ？二人用なんだし」

懸命にせがんでくるやよに根負けした僕は二百円を財布からとりだして両サイドの料金をいれる縦長の穴にお金をいれた。やよはもうボードのうえにたっていてワクワク顔で画面に釘づけになっている。僕はやよに聞こえないように溜め息をつくと音楽を選択する。たるべくレベルの低いものを選んだ。

「はじまるよ。二曲だから」

気落ちしながら言った僕に子供のような顔で「うん」と頷いてくれた。そんな顔を見たらなんだか、もういいかと思わされてしまう。音楽が流れて少ししてから矢印が画面のうえからしたへ落ちてくる。苦手意識からか少し緊張する。矢印がふめなかったりふめてもずれていたりで散々だった。やよもはじめてだから散々だろうと思ってチラッと見たら楽しそうにやっていた。一曲目がおわって馬鹿らしくなった僕は次の曲を選ぶとやよの後ろにたってやよのお手並みを拝見することにした。

「やらないの」
「ああ、苦手だからもういい」
少し拗ねて言うとやよはくすくすと笑って視線を画面にもどす。曲がはじまる。やよは冷静に画面の矢印を見てタイミングよくステップを刻んでいく。聞いたこともなければやったこともないはずなのにほぼ完璧にこなしていった。レベルが一番低いのにしたってすごいと素直に思ってしまう。どうやら、リズム感はかなりあるようだ。
（そういえば、踊りをしていたとか言ってたけ）
やよは教育の一環にいろいろ、習いごとをさせられていたらしい。もの心ついた時には毎日三時間以上の習いごとをしていたと言っていた。まわりもそれがあたりまえだったから辛くはなかったとやよは言っていたけど、僕なら三日もたたずに完全ダウンだなと思って聞いていた。
この後、僕はＵＦＯキャッチでやよにウサギのぬいぐるみをとってあげた。ウサギのぬいぐるみは全長六〇センチもある大きい物で、大きくたれた耳がかわいい。しかし、問題が発生。やよがあまりにも普通の生きている人のように振舞っているから忘れてたけど、僕以外の人にはやよの姿が見えない。つまり、はたから見たら、中学二年の男子が大きなウサギのぬいぐるみを抱えて歩くことになる。ゲームセンターには景品をいれる袋があったけれど、ウサギの顔が袋からでてしまっている。
「うさぎさん、かわいい」
やよは袋から顔をだして耳を垂らしているウサギを見て満足そうに微笑んでいる。僕は喫茶店の椅子に座りながら、少しげんなりした気分でやよとウサギのぬいぐるみを見ていた。椅子に座ろうとした時、ウサギを床におこうとしたらやよが怒ったのだ。かなりウサギのぬいぐるみを気にいってくれたみたいだが、僕としては隠すようにしたにおきたかった。やよとウサギはむかいあって座っている。僕のとなりのウサギのぬいぐるみは表情ひとつかえずにやよの熱い

視線をうけていた。
（まぁ、いいか）
やよの子供のような無邪気な顔にあきらめがついた僕は開きなおることにした。中学生男子が巨大ウサギのぬいぐるみをもって歩いて何が悪い。固定観念に囚われるやつらのほうが悪いんだ、と自分に何度も暗示をかけると意外と平気になってきたような気がする。
「龍輝、今度はお買い物にゆきましょう。いまの子たちの髪かざりとか見てみたいわ」
「ＯＫ、ショッピングセンターにでもいこうか？」
「よくわからないけど、お洋服とかもあるのかしら？」
「服もカバンもアクセサリーもなんでもあるよ」
「いきたいわ」
ショッピングセンターで僕はさらに後悔することになる。やよのやつ「うさぎさんに」とか言ってゴスロリの人たちが頭につける楕円形の平べったい帽子？みたいなやつが欲しいて言ったんだ。さすがに「嫌だ」と強く言ったけど、やよは許してくれずけっきょく買わされた。どれだけ恥ずかしくてどれだけ惨めだったか。平べったい白い布にピンクのリボンと白いレースが見るからにつくるのが面倒くさいですって感じに縫いつけられている、それをもってレジにならぶのが。
僕はこの時は、すぐに否定したけどこれが好きな子とするはじめてのデートだった。この時から僕はやよにかなうことなんてなかった。だって、男なら好きな子のお願いを聞いてあげたいだろ。惚れた弱みともいうかもしれない。僕はみんなに優しいと言われたことがあるけど、やよにはとくに優しかったとやよがいなくなってから思った。
町からもどって早五日。やよはゴスロリの帽子をつけた真っ白なウサギのぬいぐるみを抱いてテレビを見ている。はじめの間はテレビも珍しかったのか、かなり騒いでいたけど、もうだいぶんと慣れ

たようだ。やよは何を見ても嬉しそうに笑って好奇心旺盛な子ザルのような目で僕に質問したり素直な感想を言ってきたりする。
「やよ、晩ご飯はなに食べたい。そろそろしたくはじめるから」
「ぎょうざ、食べてみたい。私、食べたことも見たこともないもの。龍輝、晩ご飯は絶対にぎょうざがいい」
やよはテレビに映っている餃子を指さして少し興奮気味に言っている。やよは食べなくても平気だけど、やよの「気持ちをいただいている」という言葉を聞いて気持ちのこもったものを食べて欲しいと自然と思った僕は晩ご飯はやよの分もつくることにしている。やよの分は僕の昼食になる。やよは一日一回は僕の手料理を食べる。
「餃子か、皮がないけど・・・・・よし、つくろう皮も」
龍輝の言葉にやよの顔はみるみる幸せそうな表情をつくる。そして、テレビの画面に目をやってどんな味か想像して餃子への思いをつのらせていく。やよのリクエストはテレビに映ったやよの食べたことのない、美味しそうなものばかりだ。そして、最終決定を決めるのが僕の技術にかかっている。つまりつくれるかつくれないかである。つくれない時はあっさり却下でやよもつくれないものをしつこく注文したりはしない。やよは頬をほんのり染めて大きな目を細く垂らして僕のつくる餃子をまっている。小さな子供が大好きなおかずをワクワクしてまっているようにやよは僕のつくる料理をまっている。
やよの期待を一身にうけながら龍輝は台所にいくと皮の準備からはじめた。フードプロセッサーをつかうため棚からおろし、水につける。一刻もはやく仕上げるために素早く手順をこなしていく。居間にはテレビをつうじて龍輝のつくる餃子に思いをはせているやよの後姿があった。
やよと龍輝は朝も昼も夜もいっしょにいるようになった。互いのことを深く話しあうことはあまりなかったけど、つまらないことや何の変哲もないことでも二人でいればおもしろく感じられた。出会ってまだ一週間ちかくしかたっていないけれど、龍輝はずっとまえ

からいっしょにいるように感じている。生まれた頃からの幼なじみのような、空気と同じようなそんな感覚がやよから感じられるのかもしれない。ある意味やよとは幼なじみだ。僕は小さい頃から祖父に連れられてあの川でよく遊んですごした。夜の川にはいったことはあまりなかったけれど、やよは僕が生まれるずっとまえからあそこですごしてきたのだから。ある意味いままで顔をあわせなかったのが不思議なぐらいである。同じ場所にいて互いに見たことも話したこともないのだ。二人をつなぐあの川は昼と夜で二人を完全にわけていたのかもしれない。

龍輝はやっとの思いで具を包みおえると生餃子ののった皿を冷蔵庫にはいれてホットプレートの準備をする。ご飯を食べるテーブルにホットプレートをおくと龍輝はなんだか楽しい気分になった。やよはまだホットプレートを見たことがない。きっといつものように子ザルのような顔でホットプレートを興味深げに見るのだろう。

やよが笑ったり楽しそうな顔をするとほっとして同じようにうれしくなる。逆に、やよが表情を曇らせたり悲しそうな顔になったりすると無性に悲しくなってなんだか凄く悪いことをしたような罪悪感と後悔が心に影を落とすのだ。龍輝はそれがなぜなのかわからなかった。自分の気持ちを一〇〇％理解できる人間はいない。それと同じように龍輝にも自分の気持ちがどうなってしまっているのかわからなかった。第三者が見れば単純なことなのかもしれない。

温まった鉄板に手際よく餃子をならべていく。やよがニンニクを食べられるか不安だったからシソのはいった和風の餃子もつくった。全部で三〇個の餃子が行儀よくならんだ。蓋をしてやよを呼びにいく。

やよは僕の気配を感じてふりかえった。そして、たちあがると笑顔で龍輝にちかづいてくる。

「できたの？」

「まだ。焼いてるところ。ハネつける？」

「はね、て何？」

テレビではハネはやっていなかったのか、やよはハネの意味がわかっていないようだった。餃子のハネはパリパリと食感がよくとても美味しい。僕は餃子にはハネをつけるべきだと思っている。
「けっこう美味しいよ」
「龍輝がすすめるならそれにするわ。美味しいにきまっているもの」
やよは自信ありげに言うと足音もたてずに台所へとむかった。やよが歩いても足音一つしない。それは、やよが死んでいるからというのもあるけど、もし生きていたとしても足音なんてしないだろう。やよのあとを僕のスタスタとなる足音が追いかけていく。
ポットプレートに驚きながらも餃子が焼きあがるのをやよは首をながくしてまっていた。やよははじめての餃子を口にはこぶ。アツアツの餃子を何とか口にいれるとゆっくりと咀嚼していく。やよが最初に口にいれたのはシソがはいっているほうだ。
「美味しい。シソの風味がきいていてあっさりとして美味しいわ」
「こっちにあるのが、ふつうの餃子。やよ、ニンニク食べたことないだろうと思ってシソのもつくったんだ」
やよはニンニクのほうにも箸をつける。ぱくっと一口で食べてしまった。はじめの頃は少ししかほうばらなかったのに、いまは豪快に食べている。もしかして僕の影響とか考えるとかなり楽しいことに龍輝は気づいた。ゆっくり味わうように食べているやよに僕はせがむように言う。
「どう？美味しい？」
やよは口のなかがいっぱいでしゃべれないかわりに親指を天井につきたてて、グーと意思表示してきた。僕も餃子を口にほりこむと二、三回もぐもぐと噛む。ニンニクの風味が鼻をぬけて肉汁が口のなかを駆けめぐる。やよに僕もグーと親指をたてた。やよはうれしそうに笑うとまた次の餃子へ箸をのばす。グーと親指を天井にむける意思表示は僕がやよに教えてあげたこと。
僕たちはこうして毎晩二人で楽しく食事をしている。やよとの食事がやよとの時間が僕にとってどういう存在になっていくのかこの頃

の僕には想像もつかなかった。それはやよだっておなじだった見たいだけど。僕たちは大切な時間だと気づくのが遅かったのかもしれない。もっとはやく気づいていれば僕たちはもっと話しをして、もっと二人ででかけて、僕は一睡だってしなかった。このことが僕の悔やんだことのすべてだったように思う。眠る時間さえもったいないと思ったのははじめてのことだ。僕の欲しいものそれはやよとの時間だ。

僕たちは幼すぎて自分の気持ちも互いの気持ちも気づくのがおそかった。はじめから離れられないくせに些細なことにこだわって互いを傷つけた。相手を傷つけるたび自分もおなじくらい、いやそれ以上に傷ついていた。

2

僕たちは水曜日になると外へ遊びにいくようになった。移動時間だけでも二時間はかかるが、それでも遊びにいくことは楽しみになっていた。やよが喜ぶとゆうのもあるけど、いちばんは龍輝自信が楽しいからだろうか。やよはいつも僕のとなりにいてはじめて逢った時とおなじ着物をきている。やよの着物はあざやかな色の濃い青に白や黄色の花が咲き乱れたものだ。見るからに高級そうな着物はやよのイメージにぴったりでよく似あっている。

やよとの会話を楽しみながら歩いていた龍輝の目に『B&S映画化決定！』と書かれた書店のポスターが目にはいった。そのポスターを見て今日がB&Sの発売日であったことを思いだす。やよの話しを中断させて龍輝は申し訳なさそうに言う。

「やよ、本屋にいきたいんだけどいいかな」

今日、八月一六日は集めているマンガが発売する日だ。少年誌に掲載されているバスケを題材にしたそのマンガは龍輝のお気にいりの作品でいつもは指おり数えて発売日をまっているのに今回はまったく忘れていたのだった。

「龍輝、文学に興味があったの？」

やよは不思議そうな顔をして龍輝を見ている。僕は祖父の家にくる時、家にあるマンガをすべておいてきた。雑誌だってあまり読まないからやよのまえでひろげたこともない。それに、やよの言った文学の本みたいな難しそうな本なんて手にとる気もしない。やよの生きていた時代にはマンガはなかったのかもしれない。

「勉強じゃないよ。娯楽」

そう言うと僕は本屋へと進路を変更する。やよは娯楽の意味がわからないのか不思議そうに僕のあとについてきていた。僕はたくさんの本棚がならんでいるあいだを通りぬけコミックスのコーナーへ一直線にむかう少女マンガのまえをスルーして目的のものがおかれ

た少年誌の棚にいき探しはじめる。
「こんな本もあるのね。絵と言葉ばかりで文章はないのね」
僕が探している横でやよは見本と書かれたマンガを読む女の子のあいだからマンガを見て妙に納得したように言った。まさに、マンガは娯楽本だろう。小学生から大人まで幅広い年代が読むマンガはいまの僕たちにはポピュラーな物でもやよには新鮮なものだった。好奇心が疼いたのか、やよは僕にことわりをいれると書店のなかを詮索しはじめた。
僕はおめあての品を見つけて棚からだすとレジにむかい会計をすませる。そして、やよを探して書店を歩きまわった。雑誌コーナーのところへいくといま話題の映画を表紙にした雑誌を見ている女子高校生がなにかを話していた。意識しなくても聞こえてくる会話が少しばかり迷惑な感じだが、龍輝は無視してやよの姿を探す。
「ねぇ、これ、この映画メチャクチャせつない感じでいい映画だったよ。号泣でマジヤバかった」
「どういう話し？」
「主人公の幼なじみが事故にあって死んじゃうんだけど、幽霊になってもどってくるんだ。それで、主人公が幽霊になった幼なじみを好きになるんだけど、メチャクチャいいからマジおすすめ」
龍輝の耳に幽霊を好きになるという言葉がなぜかダイレクトに響いた。幽霊を好きになるとゆうキーワードでてきたのはやよの顔だ。そして、頭をめぐったのはやよへの思い。やよは幽霊だから恋愛対象ではないというのが龍輝の今までの結論だった。でも幽霊じゃなかったらやよにたいする気持ちはなにがのこるのだろう。
（幽霊じゃなかったらふつうの女の子なら・・・・・）
龍輝はそこまで考えて愕然とする。自分が自分の気持ちをきちんと認識していなかったことに。いや、誤魔化し続けていたのかもしれない。龍輝はやよが好き。それは、今まで龍輝が感じてきた好きとは根本的に違うものだ。同じように見えてまったく異なったその感情は龍輝に深い影を落とした。

「龍輝、もう買ったの？」
やよの声に僕は我にかえる。そして、自然と沸きあがってきた疑問はやよの気持ちだった。自分にむけるやよの気持ちが気になった。でも、聞くことはできない。このさきだって聞くことはないだろう。心が通じあってもむすばれることはない。やよとの未来に希望はなかった。夏休みがおわれば日常がもどってくる。やよといつまでいられるのかわからない。そんな思いを心のなかに閉じこめるように龍輝はやよにむきなおるとなるべく自然に、できるだけいつもどおりの声でやよに言うようにつとめる。
「もう、今日は帰らない？なんだか疲れた」
やよは僕の言葉に少し心配そうに黒く大きな瞳をゆらめかせた。僕の心はやよの表情以上に不安が渦巻いていた。どうして、やよは死んでしまっているんだろう。僕はどうして生きているんだろう。やよと同じ時間を共有しているのに同じ時代を共有できない。決してまじわることのない時が僕の恋をかたくなに否定し続けている。もし、やよと心が通じてしまうことがあってもそのさきに未来はない。
「龍輝、顔色あまりよくないわ。大丈夫なの？」
やよが自分のことを心配してくれている。でも、その時の僕にはこの一言がせいいっぱいだった。
「だいじょうぶたよ」
言葉にだしたあとで僕は心のなかで何度も「なにが？」と問いかけ続けた。不思議なことにやよへの気持ちを気づきたくなかったと思ったけど、やよと会わなければよかったとは少しも思わなかった。僕たちはいつもどおりならんで歩いてかえった。いつもと違うのはやよの心配そうな顔と僕のおもくのしかかった心のなか。
僕が自分の気持ちに気づいた日から三日がたっていた。僕は無理やり自分の心を制御することで、今までとおりやよにせっすることができていると思う。やよへの思いをやよに知られちゃいけない。や

よに知られたらおわりだ。いまの状態で満足しなきゃいけない。朝起きて自分に暗示をかけてやっとやよの顔が見られるようになる。やよはウサギのぬいぐるみに上半身をあずけて寝ていた。最近のやよはよく眠るようになった。はじめの頃はまったく眠らなくても大丈夫だったのに。僕が寝ている時もテレビを見てすごしていたし、テレビがおわればうたを歌ってはじめて会った時に見た光りの玉とじゃれあっていた。僕はまどろみながらやよの歌を聞くのが大好きだった。

（寝てる。最近よく寝るようになった）

僕はやよの寝顔を見ながら少し不安になった。こんなことで不安に思うなんておかしいと思うのにでも不安だった。この頃から僕は少しの変化にも不安になるようになった。僕はやよのとなりに横になった。ちかくにいるのにとどかない。近づこうとしても遠くへ離れてしまう。だから、僕はやよとの距離をつねにはかりながらせっしている。離れたくないちかくにいて、そんな感情をもてあましながらやよとの距離をはかる。

「・・・う～ぅん・・・・・・」

やよが目を覚ます。眠たそうにゆっくりと目を開けるとやよは僕の顔を見て優しく微笑んだ。そして、ゆっくりと起きあがる。

「もう、夕方」

「そう。もうすぐ晩ご飯だよ」

「なん時間、寝ていたのかしら」

「さぁ。でもかなり寝てたよ」

「そう」

やよはそう言うと少し目をふせる。ウサギのぬいぐるみを両手で抱きしめるとそこに顔をうずめてなにか呟いた。僕は聞きとれなかったからやよに「なに？」と聞きなおした。

「お好み焼きが食べたい・・・」

やよは基本的に食いしん坊で美味しいものを食べることをこよなく愛している。それに、好奇心旺盛なやよは見たことない食べ物は

とりあえず口にはいれる。これまでに口にしたものはカレー、生春巻き、八宝菜、餃子、冷たいジャガイモのスープ、ソーセージに多種多様の洋菓子だ。やよは甘いものにとくに目がないらしく、機嫌をそこねても洋菓子ひとつでなおってしまうくらいだ。こういうところを見るといつの時代も女の子は甘いものが好きなんだなと妙に感心してしまう。母や祖母もケーキとか大福などの甘いものは大好きだ。世代や時代をこえた共通点を見つけるとそれが遺伝子レベルにまで刻みこまれたものなのかと思ってしまう。

やよはこの日も綺麗にすべてを食べおえると満足そうな顔をして「ごちそうさま」と手をあわせて言った。僕もいつもどおり「おそまつさまでした」とかえすとやよの分にラップをして冷蔵庫に手際よくいれていく。やよはうれしそうに僕に今日のお好み焼きの感想を言って僕の料理の腕をほめている。やよとのたわいない時間は幸せで温かくてそして、どこまでも切ない。切なさが大きくなればなるほどやよへの気持ちが比例していくようだった。やよがいつかいなくなってしまうことなんてこの時の僕は考えないようにしていた。

やよの気持ちが僕にむいていないことだけが今の僕の救いで、むいていないだけでなく僕の気持ちにも気づいていない。僕は細心の注意をはらってやよに気づかれないようにやよとの生活をおくっている。僕たちの関係はどういうのだろう。友達とは少しちがうような気がする。それは、やよに恋しているからそう感じるのかどうかは僕にはわからない。

「明日はどうする？川で遊ぼうか？」

「釣り？川で歌うの気持ちいいよ。合唱しましょう、龍輝」

「だから、僕はオンチなの歌なんてうたいたくない。やよの歌聞いてるのもかなり楽しいけど、それじゃダメ？」

やよは不服そうにとなりに座っているウサギのぬいぐるみの鼻を人さし指でおさえた。やよは歌ったり踊ったりするのが好きだ。僕にはない絶対的なリズム感と音感がそなわっていて、やよの歌声は僕を癒してくれるけかわりに麻薬のようにとりこにさせる。

「上手じゃないから歌わないなんておかしいわ。龍輝だって音楽好きでしょう？」
「まあ、たしかにきらいじゃないけど・・・・聞くのが好きなだけで歌うのはちょっとて感じ」
「じゃあいままで歌ったことないの？」
「・・・・・・ある」
歌ったことないと言いたいところだが、義務教育のカリキュラムにはきちんと音楽という科目が組みこまれている。とても、歌ったことがないなんてとてもつうじない。観念しきれない思いで恨めしく僕は言うとやよの顔が晴れやかなものになっていく。その表情の変化を目で追いかけながら、心のなかで負けを認める。それと同時に好きな子のまえで恥をかかなければならない覚悟をきめなくてはならない。
「他の人が龍輝の歌声を聞いたことがあるのに私はないのよ。それはずるいわ。歌ってくれるでしょ」
疑問系じゃなく決定系のやよの言葉に頭のなかでもう一人の自分が『敗訴』をかかげる。最高裁判所で敗訴を告げられた僕はやよのつきつけた告訴をうけいれるしかなかった。
「わかった・・・・・明日、少しだけ歌うよ」
うちひしがれて言った僕とは正反対にやよはうれしそうに約束よと念を押してくる。僕の死刑執行日は明日の昼にきまった。その日の夜は明日の昼がこないことを願ったが、無常にも時間はすぎていった。時間はとまることを知らないのだ。かならずくる明日の昼もいずれやってくるやよとの別れもとまらずやってくる時間は公平なのだろうか。

明るくテンポのよい音楽がやよの耳に飛びこんできた。点滅しながらもち主を呼んでいるケイタイ電話ははじめて見た時、ほんとうに驚かされた。手のひらにのる小さな箱が遠くの相手と話すためのものだと言うのだから。しかも、手紙も送れて相手につくまでに数

分もかからない。やよにとっては見るものすべてが珍しいものばかりだがこれほど驚いたものはない。たまに川に遊びにくる人はいたけど、釣りをしたり泳いだりするぐらいであまり珍しいものはもってなかった。一生懸命に龍輝を呼んでいるケイタイ電話に少し手をかしてあげる。やよは龍輝を呼びにいくことにした。龍輝はいつものように庭で洗濯物をほしている。

「龍輝、ケイタイが呼んでいるわ」

龍輝はほしかけの洗濯物をほしおえると健気なケイタイ電話のもとへいってしまった。やよはなぜだか胸が苦しくなる。なぜなのかわからないけどはじめは珍しかったケイタイ電話が鳴るとやよの気持ちはざわざわと小さな波をたてた。

龍輝の母さんはほぼ毎日電話をしてくる。そして邪魔くさそうに龍輝は会話をする。時には電話にでず、私との会話を優先してくれたりする。そういう時はほっとするようなうれしいようなよくわからないけど悪い気はしない。やよの母さんは子供にも夫にも興味がない人だった。かといって龍輝がうらやましいわけではないと思う。うらやましかったらもっと違う感情になるはずだから。龍輝と出会ってから自分では理解できない気持ちや行動がおおくなった。それらは、不可解なものもあれば心地よいものもあり、はじめての感覚ばかりだ。

縁側で洗濯物とそのあいだからのぞく空の青を眺める。昼の光りが体にふりそそいで透けて板のうえにぶつかる。実体のないこの体は物理的に存在するものとは基本的にまじわることはない。龍輝が「幽霊に触れられるのか」と聞いた時にすぐに答えることができなかった。答えることができなかったのではない答えたくなかったのだ。どうして、答えたくなかったのかそれすらも理解できないけど、それを口にだしてしまうことがひどく哀しくて寂しい気がした。

わからないことばかりで混乱することもあるけれど、龍輝のそばを離れることはできないし考えると気がめいる。だからやよは龍輝との時間をなにも考えず楽しむことだけに集中する。龍輝がいない

と落ち着かない。子供がひとりになることを寂しがっていやがるのとおなじようなものかもしれない。龍輝がどう感じているかわからないが、やよは龍輝といると楽しいしほっとする。龍輝には人をなごます不思議な力があるのかもしれない。

龍輝の電話がおわったようだ。龍輝が呼んでいる。やよは龍輝のもとへいく。ふんわりと龍輝のまえにあらわれると、龍輝はかなり慌てていた。なにをそんなに慌てているんだろうと思い龍輝にたずねる。

「どうしたの？」

「やよ、どうしよう。母さんたちがくる」

龍輝の思わぬ言葉にやよの理解力がいっとき停止する。いっぱくあけてやよは反応をかえした。

「・・・・・・そう」

「そう、じゃなくて。母さんたちがきたら邪魔だろ」

「えっ」

「母さんたちがくるってことは二人でおちおち晩ご飯も食べられなくなる」

龍輝が言ってくれた言葉が体中に染みわたる。浸透しながら心のそこからうれしさがこみあげてきた。家族よりもなによりも自分といる時間のほうが大切だと龍輝が言ってくれているのだ。龍輝の家族がくることはやよにとっても好ましくなかった。龍輝との時間は楽しいし穏やかな気持ちにさせる。でも、自分は死人だから龍輝の家族がくればそれもできなくなる。居場所がなくなると思うからだ。

「龍輝は私といるほうが楽しい？」

自分の口から無意識にでた言葉にやよ自身が驚く。なにを言ったのか自分でもわからない。自分のはっした言葉の意味を理解していくにつれ、やよの頭は混乱する。そして、不安になった。龍輝がどう答えてくれるのか不安になったのだ。龍輝はなにか眩しいものでも見るように目を細めるといつもの優しい笑顔で答えてくれた。

「楽しいよ。どんな友達といるよりも楽しい。よやは今までできた

友達のなかでいちばんかな」
　龍輝が自分といると楽しいと言ってくれたのだから喜ばなければならないのに、友達のなかでいちばんと言ってくれたことに、やよの気持ちは苦しくなった。では龍輝にどう答えてもらえば満足だったのか。楽しくないなんて言われるのは絶対にいや。また、頭と心の矛盾がやよを支配する。昨日の歌でもそうだ。無理をしてまで歌う約束をつけることはなかったのに、他の人が龍輝の歌を聞いたことがあると思うともうだめだった。小さい子供のように駄々をこねてなんでも知りたがっているようだった。
「やよ？」
　龍輝が顔色をうかがうように名前を呼んだ。やよは慌ててにっこりと笑う。すると龍輝はほっとしたように頬の緊張をといた。やよは自分が龍輝にたいして強い独占欲をもっていることは認識している。でもそれがどこからくるものなのかわからない。いままで生身の人と話すことができなかった。でも、龍輝は違ったのだ。だから自然と特別視しているのかもしれない。
「やよ、母さんたちがきたら毎日川にいこう。そしたら話しとかできるし。あ、でも買い物とかできなくなる。あ、そうだ。母さんたちがくるまえにどこかいこうか」
「お母さまたちのことをそんな風に言ってはだめよ。それに、龍輝を産んだ人がどんな人か気になる」
「そうかな。で、買い物いく？」
「いくにきまっているでしょう。でも、今日は龍輝の歌声を聞かしてもらうの。はやくいきましょう」
　やよは悪戯っぽく笑うと玄関にむかった。龍輝がそのあとをおもたい足どりでついてくる。やよの足どりはかるく、誘うように龍輝のまえをすすんでいく。生きていた時には知らなかった表情や感情を見せる自分に驚く。でも、けっして不快なものではなく心地よいものだ。しかし、こんな風に思ってもいないことをいい子ぶって龍輝に言った時の自分は頭のどこかで冷めているような感じがする。

龍輝によく見られたいといういやらしさが自分にもわかるのが不愉快なのだ。でもわからないともっと不愉快。

夏の強い陽ざしが青々とした木々たちにやわらげられ龍輝に降りそそぐ。川のせせらぎが優しく龍輝の歌声をサポートする。龍輝の歌声は音程がばらばらで不安定なものだった。それでもやよは十分満足したし、龍輝が顔を赤くして「もういいだろ」という目で自分を見てくるのもかわいいと思う。やよは龍輝の歌声に自分の声をそっとかさねる。たちあがると龍輝の顔をのぞきこみながらソプラノのきれいな声で歌詞をつむいでいく。今度は、龍輝が座って聞くばんでやよはふわっと体を浮かすと龍輝とむかいあう。足のしたは穏やかに流れる川。

はじめて龍輝のために歌った時は歌っている途中で龍輝が寝てしまった。せっかく歌っているのにと思ったけど、あいはんしてなぜかうれしかった。胸がキュッとして苦しいのにうれしい。はじめての感覚が心のなかを温かくみたした。目を覚ました時、龍輝はものすごく慌てて謝ってくれた。やよは少し背伸びをして龍輝に笑うと「別にいいわ」とすまして言ったのだった。

龍輝は久しぶりに降った雨を恨めしい気持ちで見ていた。やよはウサギのぬいぐるみとならんで天気予報を見ている。母さんたちがくるまえに二人ででかけようと言っていたのに天候がそれを許してくれない。ニュースではこれで水不足が緩和されるとうれしげに告げているが龍輝にはどうでもいいことだ。

「雨がたくさん降っているのね、どこもかしこも」

「今日も一日中雨だろ。これじゃあ、でかけられないよな」

「明日よね、龍輝のお母さまがくるのは」

なんとも思っていないのかやよは平然とそんなことを言う。僕は少しむっとした。やよは僕のことを友達ぐらいにしか思っていない。よくて親友かな。僕だってやよに自分の気持ちを知られることもやよに思いをよせられることも困るのにこんな風に不満に思う。そし

て、最近いちばん困ることは邪な自分の体。龍輝だって健全な中学男子なのだ。好きな女の子に触れたいし、キスだってしたい。そして、着物はよけいにやよをなまめかしく僕に見せた。

「そう、明日くる。明日から晩ご飯どうする？」

母さんたちがくるとやよの分だけつくることができなくなる。一日一回の食事をやよはなによりも楽しみにしているのを僕は知っていた。だから、母さんたちがきてやよがゆっくりと食事できなくなることがいちばん気になっている。やよは僕の問いかけに少し考えたそぶりを見せると言った。

「ご飯か、龍輝の手料理が食べられなくなるのは残念だけどしかたないわね」

やよはなんでもないことのように言ったけど僕はやよががっかりしているように思えた。かといっていい方法も思いつかない。やよはふたたび歌いはじめた。僕はやよの隣りで必死に考える。やよが晩ご飯を食べられる方法を。そして、ついに思いついたのは僕が家族と食べる時間をずらす方法だ。僕が食べないあいだにやよが食事をすませればいい。僕はやよにこの提案を話した。やよは遠慮がちに言って断ろうとしたけど、僕はそんなやよを押し切って決定にもちこんだ。なぜだか清々しい気持ちになってやる気が湧いてきた。

明日、母たちがきてもきっとなにもかわらないと思っていた。僕たちは一日のほとんどをこの川で過ごして話しをしたり一緒に遊んだりなにげない二人の時間をこれまでとおなじように過ごすものだと思っていた。違いは二人でいる時間が少しへるだけだと。

そして、明日は遠慮することなくおなじようにやってきた。僕たちは午後には到着する母たちをまちながら二人で最期の食事をとった。二人での最後の昼食はハヤシライスだ。テレビもつけずに二人でいつものように話しながら食べる。

「やよ、母さんたちがきたら川へいこう」

「どうして？お母さまたちをほったらかして？」

「いいんだよ。みんながいたら話せないし。川で歌でもうたってよ」

やよは少し意地の悪い顔をして僕の目をのぞきこむとからかうように言う。
「龍輝も歌ってくれるでしょう？また、合唱しましょう」
僕はうっとした顔を反射的にするとやよに目で訴える、『ＮＯ』と。どうせ口で言っても負けるなら今度は無言の抗議だ。しかし、それだけではひきさがらない手ごわい敵は僕には一切責任がないところを攻めてきた。
「龍輝がお買い物に誘ってくれたのにできなかったでしょう？すごく楽しみにしていたのに」
「それは天気のせいだろ。それじゃあ今日いこう。晴天だし」
僕は開け放した窓から真っ青な空を見て言った。やよもおなじように空を見つめると眩しそうに目を細めたかと思うと最後のひとくちを口に意れる。僕もやよをおうように口にいれていく。僕は慌てて食べた。だって、やよが「いく」と言いだすものだと思っていたからだ。でも、やよの口からでたのは意外な一言だった。
「いかない」
えっと思ってやよの顔を見あげたところで玄関から母さんの声が聞こえた。
「ついたわよ。龍輝、いるの？」
僕は慌てて空になった自分の皿を流しにつっこんだ。そして、騒がしい団体に叫びかえす。
「いるよ。台所」
やよは興味深げに僕を見ると小さく右手をふって「川でまってる」と言うとすーうときえてしまった。きえていく瞬間、悲しそうな寂しそうな顔をのぞかせたかのように僕の目には映った。そして、慌てて考えなおす。僕の思いちがいだと、自分がそう思いたいだけなんだと。離れて寂しいのは自分のほうだから。
言っていたよりもずっとはやくきた母さんたちは開けっ放しの玄関からはいってくると僕のところに一直線にやってくる。そして、居間に荷物をおくと台所にやってきて椅子にどかっと座った。やよと

は大違いの動作に思わず目をおおいたくなる衝動をたえきって、二人にお茶をだす。
「今からご飯なの？」
テーブルにおかれているハヤシライスの皿を見て母は言った。僕はついさっきまでやよが座っていたところに座ると「そうだよ」と短く言う。愛想のない息子にそれ以上なにも言わず。コップにはいった麦茶を飲む。僕は三皿目のハヤシライスにスプーンをさしこむ。いくら男の子はよく食べるといっても三皿はつらい。
「そうそう、栄美ちゃんも連れてきちゃった」
なんだって、と思ったが僕は平静をよそおい興味がないように「ふーん」と返事をかえす。栄美は僕の父方のいとこだ。父には兄弟が三人いていちばんしたの修司叔父さんのひとり娘だ。栄美とは幼い時から交流があって、仲のよい兄妹のように育ってきた。最後に会ったのは今年のお正月だからもう半年以上も会っていない。
「やっぱり、成長期よね。びっくりするぐらいお姉さんになってるんだから」
半年ごときでなにを言っていると母を馬鹿にしつつはやく食べおわろうとピッチをあげる。
いそいで食べる僕に祖母はゆっくり食べるように言ったが、そんなのかまってられない。慌てて食べていると背後から少し高めのはりのある声が聞こえた。ふりかえらなくてもわかるその声は栄美のものだ。
「おばさんの荷物も部屋に運ぼうか？」
やはり声の主は栄美だった。しかし、目の前にいるのは幼い時の栄美とはまったくの別人のようだった。かわいくメイクをして髪もきれいに整えて服装もかなりセンスがよかった。母が言ったように栄美はこの半年でかなりかわっていた。
「あら、悪いわね。栄美ちゃんも疲れたでしょう。こっちにいらっしゃい」
気を使って言ってくれた栄美の言葉に上機嫌で答えると母はわざ

とらしくちらっと僕を見るそしてわざとらしく言う。
「男の子はだめねぇ」
（ほっとけ）
心の中で毒づきながらあえて無視をきめこんで最後のひとくちをお茶で流しこむ。皿とコップを流しにはいれるとさっさとたちさろうとした。かまっている時間はない。やよが僕をまっているのだ。
「龍輝、どこにいくの」
そんな僕をひきとめたのは栄美だった。意外な阻止にあった僕は栄美にふりかえると少しまをおいてから「どこでもいいだろ」と言って飛びだしてゆく。

やよは大きな台のようになっている岩のうえで龍輝をまっていた。ステージのようなその岩はやよと龍輝の特等席で龍輝はここから川へ飛びこんだり釣りをしたりする。一方、やよはここでうたを歌うのが好きだ。はじめて二人でならんで話しをしたのもここだった。やよは思ったよりもおそい龍輝をまちながら鼻歌を風にのせる。
（龍輝、おそい・・・・・・）
やよはなんだか不安になってきた。龍輝との時間がはじめから存在していないように思えてくる。龍輝が家族との時間を楽しんで自分のことを忘れてしまうかもしれない。久しぶりに会った家族なのだからそれでもいいだろうと思うのに、龍輝の心から忘れさられてしまうようなそんな不安があった。体をすりぬけていく木洩れ日たちを目に映しながら瞳が揺れる。
（こんなにもあいまい・・・・・・）
やよは最近よく眠るようになった。それはまるで生きている人間のようにその行為が必ず必要なように眠る。瞼がおもくなって目も開けられなくなってくる。そして、生きていた時のことがぬけ落ちていく。記憶はやよをやよだと証明するもの。やよの存在を認めるものなのだ。それが流れゆく水のように零れてなくなっていく。
人の命は流れゆく水とおなじ。川となして大地を走り、蒸気とな

って空にかえる。雨となって大地に降りたち、再び大地を流れていく。ふたたび大地にかえる時がちかづいているのかもしれない。
やよは最近おぼえたうたを歌いだした。バラード系のしっとりとした歌だ。テレビで流れていたのを聞いて覚えたもので叶わない恋心を歌ったものだ。歌っていると切なくて苦しくなる。それでも、やよはこの歌にひかれていた。歌は龍輝を呼んできてくれる。はじめて会った時もやよはうたを歌っていた。そして、そこにあらわれたのが龍輝だった。この歌が龍輝を呼んでくるように風に思いをのせてゆく。
龍輝がくるほうを見ながら歌っていると人が歩いてくる気配がした。やよは岩棚からおりると龍輝のところへ駆けつける。そこには龍輝以外に龍輝とおなじくらいの年の女の子がいた。瞬間、呼吸がとまる。龍輝と目があうまでやよは動けずにいた。龍輝は目でごめんと合図してくる。龍輝が悪いわけじゃないからやよは首をふって言った。
「いいの。親戚?」
やよが聞くと龍輝はその子にわからないように小さく頷く。さいわい女の子の目には自分は見えていないようでまったく気づかない。龍輝は何度も目で謝っていた。気の毒になるぐらいに謝っている龍輝にやよはできるだけなんともないように言う。
「気にしないで、それに昼がだめなら夜があるわ。星空のしたで語り合うのもなかなかおつなものよ」
龍輝は苦笑いを浮かべるとふっと気をぬいたような優しい顔になる。やよはその顔に直撃された。心臓がとくとくと信じられないはやさで脈をうつ。今までだって不整脈をおこすことはあったけどいまほどではない。自分の動揺を隠すように龍輝に背をむけた。
「龍輝、すごい。あそこ棚になってる」
龍輝が連れてきた女の子はさっきまでやよがいたところを指さすと無邪気に言った。やよは一気に蹴落とされた気持ちになる。龍輝は少し困った顔をしてその子に言った。

「栄美、危ないからいくなよ」
「大丈夫よ。龍輝もいっしょなんだから」
そう言うと龍輝の手をにぎって岩棚にいってしまった。やよはもう見ていられなかった。なにより胸が苦しい。苦しくて、苦しくてなにがそこまでやよの胸をしめつけるのだろうか。でも、やよにはもう二人を見ていることは不可能だった。龍輝に気づかれないようにそっときえる。
やよにはいくところがなかった。龍輝と出会うまえはどこで過ごしていたのかと不思議に思うほどに。そして、最終的にむかったさきは龍輝の部屋だ。テレビにむかって座っているうさぎさんにそっと腕をまわす。龍輝にとってもらったウサギのぬいぐるみはあいかわらずかわいい。ふわふわの毛に大きな黒い瞳がブラン官に映っているけど当然やよの姿は映っていない。
龍輝に栄美と呼ばれたあの子は龍輝と同じ時代に生きている。やよとは違うのだなにもかも。このウサギのぬいぐるみにすら触れることのできない自分にはあの子のように龍輝の手をひくなんてとても叶わない。しかたないことだけど悲しい。
「うさぎさん」
呼んでみる。もちろん返事はしてくれない。うさぎさんに膝枕をしてもらってそっと目を閉じた。つらい思いに疲れて眠りに落ちていく。したからは龍輝のお母さまたちの話し声が聞こえてくる。龍輝との時間も場所も一気にとられてしまったように心細い。龍輝が家族と過ごすかけがえのない時間なのに自分はきたない。子供のように龍輝に駄々をこねてしまうんじゃないかと思うとみっともなくていやだった。
（いつかえってくるのだろう）
龍輝がかえってくるのをまつことしかできなかった。はやくかえってきてこの気持ちをどうにかして欲しいとやよは切に願った。龍輝と話しをすればきっとなんともなくなる。いつもそうだから、龍輝と話しをしたり笑ったりするだけで気持ちはかるくなって温まる

から。
（はやくかえってきて）
龍輝がかえってきた時にはやよは寝ていた。気づいたら三時間も栄美につきあわされていた。かえってきたことにも気づかずにすやすやと寝息をたてて寝ているやよは愛らしい寝顔をおしげもなく僕に見せている。その頬にそっと触れたい。だけどそれはできないことだ。触れられない分、僕は何時間でもやよの寝顔を見ていた。一時間でも二時間でも三時間でもずっとあきもせず見ている。
「龍輝、ごはんよ。おりてらっしゃい」
一階から母さんの声が響く。僕はやよを起こさないようにそっとぬけると一階におりていく。昼ハヤシライスを三杯も食べたのだ。お腹がすいているわけがない。はっきりいってやっとお腹が落ち着きだしたところで食べたくない。台所にいって冷蔵庫から麦茶をとりだしながら母さんに言った。
「今日、ごはんいいから。眠いし、風呂はいって寝る」
「どうしたんだい？具合でも悪いのかい？」
祖母が心配そうに顔色をうかがっている。僕は「大丈夫」と笑いかけるとコップにそそいだ麦茶を飲みほして風呂場にいそいだ。これいじょう詮索されるのはごめんだ。逃げるように浴槽につかると熱すぎずぬるすぎず調度いい温さの湯が体にしみこんでくる。お湯を両手ですくってザブザブと顔を洗うとその手で前髪をかきあげた。
（やよ、ようすがおかしかった）
今日のやよはようすがおかしい。正確には川からなのだが。いつもだったらすぐにどうしたのか聞くのに、栄美がいるから聞くことができなかった。突然いなくなるし、かえったらやよから理由を聞こうと思っていたのにやよは寝てしまっていた。
風呂からあがって部屋にもどると完全に暮れた空が燃えつくような赤から染め上げたような黒へとかわっていた。明かりのない不完全な闇のなかで浮かびあがっているのはウサギのぬいぐるみとやよ

の後姿。僕はそっとちかよるとウサギのぬいぐるみをあいだにはさむように座る。ウサギのぬいぐるみのまえにペットボトルにはいったアイスティーをおく。

「やよ」

触れないかわりに名前を呼んでみた。なんの反応も見せずやよは眠ったままだ。やよが眠っていると不安に思う。もちろんやよの寝顔はかわいいし愛おしいけどそれでもそこしれぬ不安が心をしめつけた。やよとの時間がおわりをむかえてしまうような不安を感じては何度も龍輝は頭でそれを否定する。

「やよ」

もう一度呼んでみる。でもその声は一度目とは違いきえいりそうで酷く不安定なものだった。不安をけしさる速度より不安が増加する速度のほうが遥かにはやいように感じていた。なげだすように畳のうえにおかれた手にそっと自分の手をかさねる。けっしてやよの手の感触があるわけでも温もりが伝わるわけでもない。空間に手をおいているのとかわらないのにひどく安心した。そして、そのまま横になるといつのまにか眠ってしまっていた。

夢のなかの僕はやよとおなじようになっていた。やよのように人としての生をおえている。やよとおなじように空を飛んで、仲のいい恋人たちのように手をにぎりあって話しをしたりうたを歌ったりキスをしたりした。でも、幸せな夢のなかでも、もう一人の僕が冷静にそれを見ている。悲しい目で見ている自分の目に耐えかねて幸せな世界に目をくらませた。

やよが好きだ。やよとの時間は誰と過ごすよりも楽しくて温かくてそれとおなじぐらい苦しくて切ない。離れることはできないし他の女の子を見る余裕すらもう僕にはなかった。このまま想いがつうじなくたって何十年、何百年とやよを想い続ける。初恋が実らないのならそれでもいい。でもせめてそばにいさせて欲しい。離れることのないたしかな時間が欲しいと思った。

つかめないやよの手のかわりにウサギのぬいぐるみの手をやよの

手に触れるように優しくにぎる。ぬいぐるみの毛の感触が手のひらにあたたかく、やわらかく、安らぎを伝えてくる。やよの手もきっとウサギのぬいぐるみのようにあたたかくてやわらかいにきまっている。ぬいぐるみのように白い肌は極上のシルクのような手触りだろう。触れることのないその手に触れたいと僕は何度も憧れを抱いた。

今日も栄美と呼ばれた女の子は龍輝と川にきていた。龍輝といっしょに楽しそうに泳いでいる女の子にどうしても目がいってしまう。あの日から龍輝との時間がほとんどなくなってしまった。今も私は見ているだけでなにもできない。龍輝と言葉もかわすこともままならなくなってしまっている。それでも、夜もふけると龍輝は無理をして私とうさぎさんを外へ連れていってくれた。いつのまにかその場で寝ていることもあるけど、やよの楽しみな時間だ。

あの日は目を覚ますとまじかに龍輝の顔があって驚いた。お日さまがうっすらと頭をだしてあたりはうす暗かった。龍輝はうさぎさんの手を握って寝ていた。やよはそっと龍輝に触れる。かさなりあわない手と頬はたがいのことを伝えあうことはない。それでも、なぞるように手を動かした。

「・・・ううん・・・・・・」

思わぬ龍輝の反応にやよはとっさに錯覚を起こした。触れていると思って手を慌ててひいたのだ。そして、はっと我にかえる。触れあうわけがないと。だからこのうさぎさんに何度も触れるのだ。龍輝が触れるこのウサギのぬいぐるみは龍輝との距離をうめてくれるような気がして。龍輝が握っているうさぎさんの手とは逆の手を握る。そして、龍輝の顔を見る。もう眠たくないやよはそのままで子守唄を歌い続けた。龍輝が少しでもいい夢が見られるように。

龍輝は誰にでも優しい。それは別に悪いことではない。でも、胸の奥がもやもやする時がある。特にあの子に優しくする時は酷いような気がする。もう死んでいるのだから病気ではないだろう。だい

たい、死んでから病気で苦しむなんて聞いたことがないし、そんな人がいたらお笑いだ。兄妹のいなかった龍輝にとって彼女はかわいい妹のような存在なのだろう。だから、強く言ったり拒否したりできないのかもしれない。それに、彼女は親戚だし。

二人は日が沈む少しまえにかえる。いつも、日が沈むまえに龍輝が彼女を水からあげる。はじめは文句を言っていたが、龍輝が「水が冷たくなって体が冷えるだろ」と言ってからすんなりとあがってくるようになった。そして、家にかえって二人がするのは居間でテレビゲームだ。これは彼女がもってきたもので二人用のゲームばかりだ。

「栄美、さきに風呂にはいれよ」

さきに家にあがった彼女に龍輝は優しくそう言った。彼女も「そうする」と言うとお風呂場へいってしまった。彼女の唇が寒そうに真っ青になっていたから龍輝が気をつかったのだろう。二人はほんとに仲がいい。龍輝のお母さまたちがきてからやよの知らない龍輝ばかりを見せられる。やよの知っている龍輝とは別人だと錯覚してしまうような時すらある。やよは龍輝の背中に声をかけた。

「龍輝」

龍輝はタオルで頭を拭きながらふりかえる。やよはその時はじめて自分が龍輝の名を呼んでいたことに気づく。そして、心配そうな顔をしている龍輝の目を見つめる。そのまま何秒たっただろうか。不意に気を抜いたように龍輝に笑いかける。そして、大人のような口調で龍輝に言った。

「なんでもない。呼んだだけよ」

不思議そうな顔で見ている龍輝になんでもないように笑いかけた。そして、ぼろがでないうちに龍輝の横をとおり過ぎる。それはまるで、龍輝の目線から自分の顔を隠すように。すると、今度は龍輝に声をかけられる。

「やよ」

「なに？」

振りかえらず龍輝に聞いた。龍輝がやよのまえにまわりこむと続けて言う。龍輝は柔らかく笑っている。こういう笑い方をする時は人に気をつかっている証拠だ。

「このまま部屋へいこう」

「でも・・・・・・」

これから晩ご飯だし、龍輝だって体が冷えているに違いない。だって、彼女とおなじように唇が変色している。それなのに龍輝はやよを気にしてくれて気をつかってくれているのだ。うれしい気持ちと申し訳ない気持ち、でもうれしい。申し訳なさよりもうれしさのほうが勝っていると自分でもわかった。だって、さっきまでの曇った気持ちはどこかへ吹き飛んでしまったから。龍輝はそれ以上なにも言わず自分の部屋へすすんでいく。やよは龍輝にあやつられるように龍輝のあとをついていく。目に映る龍輝の背中に優しいものを感じて温かい。

龍輝の部屋でゆっくりと話しをするのは何日ぶりだろう。もう何年も話していなかったような気になる。やよはうさぎさんにもたれかかり龍輝とむかいあって話しをした。やよの知らない龍輝が知りたくていろいろと質問する。学校のこと友達のこと好きなものやきらいなことそして、彼女のこと。

「栄美？栄美は父さんの弟のひとり娘で、僕とは兄弟みたいなものかな。僕の生まれた一年後に栄美が生まれたからもの心つく頃には仲良く遊んでた。家もちかかったから幼なじみみたいなとこもあるかな」

「いまもちかくに住んでいるの？」

「いや、去年叔父さんの転勤で引越ししたから、いまはちかくにはいないよ。半年いじょう会ってなかったし。それより、やよのほうこそどうしたの？」

龍輝がうかがうように見つめてくる。龍輝の瞳に映る自分を見て不思議と自分の存在を感じる。死んでからずっと思っていた。存在しているのにしていない。生きている人と言葉をかわすこともなか

ったから。もちろん死んだ人とたまに話しをしたりするけど。
「なにが？」
「最近、おかしいだろ。なにかあったのかなと思うだろ、ふつう。悩みごとでもあるのかな、やよ」
とぼけるように言ったやよにたいして龍輝が真剣なまなざしで聞きだすように言ってくる。やよは困ってしまった。自分でもどうしていいかわからないのに、龍輝にどう説明すればいい。この気持ちの正体をどうすれば知ることができるのだろう。龍輝はふううと息をつくと困ったように苦笑いをすると、やよから目をそらして「もういいよ」と言った。きっと私が困った顔をしていたから。でも、そらす瞬間に見せた悲しそうな瞳がひっかかる。
やよはその目をやめてほしくて、でも、どうすればいいかわからない。自分にもわからないことを人に説明することは不可能なことに思えた。「彼女がいやだ」と言えば龍輝は「なぜ」と聞いてくるにきまっている。彼女のことをなぜいやなのか自分でもわからない。生理的にうけつけない人はいるけどそれとは違う。なにか言おうとしても何も言えずどうしたらいいか考えていた。二人の間にはおもい沈黙が流れた。龍輝の言うように最近へんなのだ。やよだけではない。龍輝だっておかしい時がある。そして、二人のあいだにへんな正体不明のなにかがはさまっている。
「りゅ・・・・・・」
「龍輝。ごはんよ」
やよが龍輝を呼ぼうとしたらそれにかさなるように龍輝のお母さまが階段のしたから龍輝を呼んだ。龍輝は扉も開けずにお母さまに答える。
「あとで食べるから、おいといて」
お母さまはなにも言わずそのまま台所にもどっていった。タイミングをのがしたやよはどうすることもできず、また口を閉ざしてしまった。そのまま、何分かが過ぎた。こんなのはいやなのに解決策が見つからない。その時とつぜん部屋のドアが開いた。扉が開くと

ともに女の子の元気な声が部屋を支配した。
「龍輝、ついでに食べてよね。かたづけるの楽なんだから」
「勝手にはいってくるなよ。だいたいノックぐらいしろ」
ずかずかと部屋にはいってくる彼女にたいして迷惑そうに龍輝は言った。でも、彼女はなんとも思っていないのだろう、龍輝の部屋を見わたすと龍輝をまったく無視して言う。その言葉は媚びるでもなく威張るわけでもないごく自然にあたりまえのことを言うように。
「はいったのはじめて。龍輝の家の部屋は何度もあるのに、どうしてここにはいれてくれなかったの？」
だいたい彼女がこうして龍輝にいっしょに食べるように言うから龍輝はしぶしぶ食卓につかなくていけなくなる。私に気をつかって龍輝が考えてくれた計画は彼女のおかげでまったくだめになっている。
「ここは、特別なの。一人になりたいとき専用だから。それより、でてけよ」
龍輝がたちあがって抗議するように言った。彼女は「ふーん」とみじかく言うとテレビのまえにあるぬいぐるみに目をとめる。その瞬間、やよは少したちあがるとうさぎさんの頭を包みこむように抱きしめた。そして、彼女の目をまっすぐに見る。彼女がうさぎさんにちかづいてくる。やよは腕に力をこめた。でも、彼女はあっさりとうさぎさんをやよからとりあげてしまった。
「おばさんから聞いてたけど、ほんとうにかわいいうさぎ。どうしたのこれ？」
「かえせよ。ゲーセンでとった」
「だいぶんかかったんじゃない？このうえのもついてたの？」
「どうでもいいだろ。それよりでていけよな」
龍輝は彼女の手からうさぎさんをとりあげるとベッドのうえにきちんとおく。彼女はうさぎさんの頭をそっと撫ぜると龍輝に女の子の顔をむけて言った。
「それじゃ、私は龍輝の特別だね」

龍輝はなにを言われているのかわからないようすだった。やよにはその言葉が酷く残酷な言葉に聞こえた。いままでにないしうちをうけて二人のやりとりをただ見ていた。そして、彼女の言葉で気づいた。自分の気持ちの正体を、どうして彼女のことがいやなのか。触れられたくないものを触れられてはじめて気づいた。ううん、気づいていたのに認めるのが怖かったのかもしれない。

「や、やめて・・・・・・」

もう、見たくないそんな気持ちが無意識のうちに言葉になった。でも、それはきえいりそうなくらい小さいもの。龍輝が気づくはずもないほど。うさぎさんはやよにとってなによりも大切なもの。龍輝にはじめてもらったものだから。彼女はなんでももっているじゃない。龍輝に触れられる手も龍輝に料理をつくってあげることのできる腕も龍輝と一緒に育って老いていく体もなにもかももっている。そして、なによりいままで龍輝のそばで龍輝を見てきたのだ。私にないものはすべて、それなのに・・・・・・・

「やよ」

不意に龍輝がやよの名を呼んだ。二人の視線がぶつかりあう。彼女は龍輝がはっした言葉に不思議そうな顔をしている。やよの細い肩が震えだした。やよはそれを押さえつけるように両腕でしっかりと自分を抱きしめる。そして、表情を見られないように腕と胸のあいだに顔をうずめるようにすると、もうそれ以上そこにはいられなかった。

やよの小さな声をはっきりと聞いた。たしかにやよは「やめて」と言ったのだ。せっぱつまったやよのその一言に思わずやよの名前を呼んでしまった。栄美が怪訝そうな顔をしたけれどかまっていられない。やよが細い肩を抱きしめてうつむいて震えているのを見た瞬間、泣いていると思った。そう思ったらなにもせずにはいられない。手を伸ばそうとした時やよはきえていなくなってしまった。

「どうしたの？」

そう言って腕をつかまえる栄美をふりはらうと僕はやよを追いかけた。やよが泣いている。しかも、僕のいないところで。はやくやよのそばにいかないと、という気持ちが自然とこみあげてくる。やよがどこにいるのかなんてわからないでも、足は自然と川のほうへ駆けていった。二人でよく過ごした。岩棚のほうへあがっていくと思ったとおりやよはそこにいた。あの日とおなじ夜空を見あげて静かに泣いていた。きれいな横顔が涙で濡れている。

「やよ」

僕は名前を呼んで駆けつける。そんな僕にたいしてやよは逃げるように空へ飛びあがる。僕はやよを抱きしめるように飛びついたが、やよをとおりぬけて頭から水のなかへ落ちてしまった。夜の冷たい水が体にショックをあたえる。水面から顔をだすと涙に濡れた心配そうなやよの顔があった。でも、僕と目があうとまた逃げていってしまう。僕はそのままやよを追いかけた。僕がやよをつかまえられる可能性は０パーセント。それでも、必死に追いかける。

龍輝は宙を浮いているやよを追いかけて川の流れにさからう。足がつかないほど深い場所では流されないように懸命に泳いだ。浅いところまできてやっと声がだせるようになる。やよと龍輝の距離は一〇〇メートル弱だいぶんと離されてしまった。

「やよ、まって・・・・・・やよ」

何度も叫び続ける龍輝を無視してやよは逃げていく。ふりかえりもしないやよの背中に僕は今つかまえないと永遠に失ってしまうと感じていた。その思いは僕を不安にさせてあせらせる。だから必死に追いかけた。必死にやよに叫び続け、心でもやよに叫び続けた。

「やよ」

（どこにも行かないで・・・）

夜の空気が濡れた体を冷やしていく。体力も限界だった。追いつくどころかさがひらいていくばかりだ。それでも目だけはやよを見失わないように彼女の背中をとらえ続けた。外気の冷たさや筋肉のきしみも感じるのに気にもならなかった。それ以上にやよを失うか

もしれないそこしれぬ不安につき動かされる。突然、やよの姿を失った。龍輝の体は龍輝の意思とは関係なくたおれこんだ。
「やよ」
反射的に呟いてやよの姿を目がさがす。やよの姿を見つけてたちあがろうとしたひざが崩れ落ちる。肉体が限界をつげていたのだった。やよの姿が急激に遠ざかっていく。あきらめきれない思いが自分でも信じられない言葉をつむぎだした。
（そばにいるだけでいい。どこかへ消えるな）
「すきだ・・・やよが好きだ」
小さく呟いた言葉はいつのまにかやけくそのような大きな声にかわっていた。気がついた時にはもうとりかえしがつかなかった。これで完全に僕はやよを失ってしまう。
やよは僕の言葉を聞き、とまって僕を見つめていた。その目にはもう涙のあとさえない、そのかわりに大きな瞳には僕の姿がくっきりと映っていた。あれだけ龍輝から逃げていたやよがゆっくりと二人の距離をちぢめてくる。僕にちかづいてくるやよに自分が告白してしまった実感がじわりじわりとわいてきた。やよが手にとどく範囲にきた時には龍輝の心臓はフルマラソンを全力で走るよりもはやくはやく脈うって体中をその機能が支配していた。
「龍輝・・・」
やよの声がどくどくと脈うつ心音とかさなって小さく聞こえる。実際にやよは小さな声で僕を呼んだのかもしれないけど、その時の僕は心音のせいだと思った。やよが僕の目を真っ直ぐに見つめてくるように僕もやよの目を見つめる。そのまま時間が流れて時がとまる。ゆいいつとまらないのは僕の心臓の音と流れていく川のせせらぎだけ。
「龍輝、ほんとうなの？」
自信のないやよの声が龍輝に呟くように問いかけてくる。龍輝は困惑した。ＹＥＳともＮＯともいえない。隠そうとしていた思いが外の世界へとでかけている。それをどうすればいいのかわからない。

「やよはどうして泣いていたの？」
苦し紛れで問いかける。やよの瞳がゆれる。心細げに顔をゆがめたやよに僕は容赦なく強いまなざしをむけてしまっていた。いつものようにやよを逃がしてあげるつもりはなかった。龍輝自信も逃げられないところにいることを自覚していた。隠そうと必死になっていた思いを思わず口にだしてしまったことで、いままでどうゆう風にやよにせっしていたのかみうしなってしまったのだ。
「・・・・・・」
やよは無言で龍輝を見つめてくる。龍輝はやよをうながすようにやよの黒く大きな瞳をまっすぐに見つめる。おもく閉ざしてしまったやよの唇にそっと手を伸ばすとやよは触れるまえによけた。龍輝は胸が痛む。普段からやよは触れられないように距離をとって龍輝とせっしている。そんなに僕に触れられたくないのだろうか。
「やよ、僕がきらい」
やよはものすごい勢いで首をふってそれを否定する。その態度にほっと息をつく。情けないことに臆病風が心を支配した。もしもこのまま曖昧なままでおわらせればやよとの時間は続くのではないか。まえとまったくおなじとはいかなくてもやよのそばにはいられるはずだ。やよが僕のまえから姿をけせば僕には手も足もだせなくなる。会えなくなるのが怖くてたまらない。数分前にした覚悟はあっというまに揺らいでいる。なんとかもちこらえようと僕は何度も邪魔な心をおいだそうとする。自分をふるいたたせてできるだけ落ちついて言う。
「恋してる。やよの気持ちが知りたい」
素直な気持ちを口にだすことがこんなにも勇気がいることだなんて思わなかった。龍輝の言葉を聞いたやよは複雑な顔をして僕から目をそむけた。その態度に僕は今度こそほんとうにやよを失ったと思った。でも、きらいなら「きらい」とやよの口から聞きたかった。動けなくなってもいいからとどめをさして欲しい。やよのことをきれいにあきらめられるように、ずるずると格好のわるいところを見

せなくてすむように。ふられてストーカーになるような無様なまねだけはいやだ。
「正直なやよの気持ちを言葉にして・・・・・・・大丈夫だから」
龍輝は覚悟をきめた。やよの言葉しだいで龍輝の未来はきまる。やよが「これまでとおなじように」と言うのなら、僕はこれまでとおなじようにせっしていけるように努力する。やよが「もういっしょにはいられない」というのなら僕はいさぎよくやよのまえから消えよう。もしも、もしも奇跡がおきてやよが僕とおんなじ気持ちだと言うのなら、僕は・・・・・・・
「・・・うさぎさんに彼女が触れたのがいやだったの。彼女は私とは違う、でも龍輝とはおんなじで私は龍輝とは違うの。龍輝に触れられない、龍輝になにもしてあげられない。彼女は龍輝にごはんもつくれる、なんでもできる。私もちゃんと存在したかった・・・・・・・龍輝、好きよ」
やよは震える声でなんとか言葉をつないでゆく。でもそれはたしかにやよの素直な気持ちだった。やよの気持ちを真正面からうけとめた龍輝は言葉の一つ一つを大切に胸にしまっていく。それでも夢を見ているのかもしれないと思うほどの幸福が僕をつつんだ。夢なら覚めないで欲しい。現実だったらいまここで死んでもいい。やよは栄美にやきもちを妬いていたのだ。僕が好きだから。
「やよ、触れてもいい？やよを抱きしめてもいい？」
「・・・・・・」
無言のまま僕を見るやよの態度を龍輝は肯定としてうけとめる。うすいガラスでも触るようにそっとやよのほほに触れる。怯えるようにかたく目を閉じてしまったやよの体を優しくつつみこむ。これまでこれほどに優しい気持ちになったことはない。優しい気持ちは僕にやよの存在をしっかりとしめす。触れることも感じることもないはずのやよのぬくもりを感じているような気がした。その温もりは僕のうちがわから僕の体をあたためていく。
「あたたかい」

呟いた龍輝の声にやよの体から力がぬけていく。やよと龍輝の体が触れ合うことは不可能なのだ。だけど、ふたりとも感じるはずのない互いのぬくもりを感じているような気がしてたまらない。手と手をつなぐことも叶わないから僕は心に触れているように感じた。きっとやよもおんなじだろう。叶わない思いがつうじあっていることが二人のすべてだ。

「僕とつきあってくれませんか」

龍輝の言葉にやよは大切にうなずいてくれた。龍輝の胸に喜びやあたたかい幸福感が嵐のように吹き荒れて心のなかをゆたかな色彩でうめつくす。龍輝はやよにもそれを伝えたくて何時間もやよを抱きしめる。やよがいるだけで幸せなのだと知って欲しくて優しく力強く抱きしめ続けた。長いあいだ、時がたつのも忘れて二人はそのままでいた。

「龍輝にお茶漬けもつくってあげられない」

不意にやよがそんなかわいいことを言うから僕はくすくす笑ってやよを抱いている腕の力をゆるめてやよの顔に自分の顔をちかづける。やよは顔がちかすぎるせいか、それとも笑われたせいか真っ赤にほほを染めて目をふせる。

「やよだけだよ。こんなにあたたかくて幸せな気持ちにしてくれるのは・・・となりにいるだけでたくさんのものをくれる」

やよの目がうれしそうにほころぶ。僕も自然と優しくほほえんで二人の気持ちがここにたしかにあることを幸せだと思った。だれに感謝したらいいのかわからないけど僕はこの時の素晴らしさをいまでも思い続けている。

このあと、僕は高熱をだして寝こむことになるけれど、それでも幸せだった。だって、やよがずっととなりにいて僕のことを心配そうに見ていたから。龍輝は熱に浮かされた意識のなかで何度もやよに好きだよと言った。言えば言うほど愛おしさが募ってあたたかくて切なくて幸せでこの世のすべてが輝いて見えた。二人にあいだにあるけっしてこえることのない壁を僕はこのとき知らずにいた。し

かし、やよはこえられない壁がもたらす運命をいつかうけいれなければいけない不幸に怯えていた。僕はやよの気持ちも知らずただ、熱にうかされながら気持ちがつうじあったことを幸せに感じて、ひとかけらの不安も感じてはいなかった。

3

暑すぎる日ざしはさすように龍輝の肌をやいていた。はじめここにきた時よりもだいぶんとやけてしまった肌が水に濡れている。冷たい水のなかにはいろんな魚たちがわがもの顔で泳いでいた。きらきらと輝く水面にこい青の着物をきた女の子がうつる。その顔は退屈そうにゆがんでいる。龍輝とやよは栄美がいるから会話もできない。栄美にはやよが見えないのだ。退屈そうなやよを見かねた龍輝はやよの目をちらっと見ると突然うたいはじめる。突然、童謡を歌いだした龍輝に栄美が怪訝な顔をむける。やよはうれしそうに笑うとおなじように歌いまじめる。

「龍輝、歌きらいじゃなかったけ」

「いいだろ。歌いたい気分なんだから」

栄美の言葉にいちじ中断。龍輝が歌うのをやめればやよも歌うのをやめた。そして、龍輝が歌いだすとやよも歌いだした。こうすればやよが退屈しなくてすむ。覚えているところだけを歌っているととんでもないところに飛んでいったりもする。二人で思い出しながら歌うのは楽しかった。そうして、歌っていると怪訝な顔をしていた栄美も歌いはじめた。やっぱり三人のなかでいちばんやよがうまい。音楽が大好きなやよはピアノも弾くらしい。いちど聞いてみたいと思うけど無理かな。

「私がカラオケにいこうって誘ってもこなかったのに」

恨めしい目つきで言ってくる栄美を龍輝は「はいはい」とかるくながす。やよと恋人になれたあの日、家にかえったら心配で怒りまくっている栄美にむかえられた。その日の夜中に高熱をだしてたおれた龍輝を看病したのは栄美だと熱がさがってから聞いた。看病と言っても薬を飲ませて冷えピタをおでこにはっただけだけど。二十四時間はなれずに高熱をだした龍輝のそばにいてくれたのはやよだった。

「栄美、そろそろかえろう。お腹すいたし」
栄美が川からあがるのを見て龍輝も川からあがる。そのまま家にかえると玄関にバスタオルがおいてある。栄美はそれで体をつつむとさっさと台所へ昼の準備を手伝いにいった。龍輝は歩いているうちにおおかた乾いた体をかるく拭くと頭にバスタオルをかけたままやよに手をのばす。やよはにこと微笑んで龍輝の手をとる。もちろんお互いの温もりを伝えあうことはない。それでもこうして手をつなぐことには大きな意味があるように思えた。
「いこうか？」
龍輝がやよを誘うとやよも悪戯ぽく微笑む。二人でそのまま玄関をくぐると外にでた。川の岩棚で僕は横になるとやよは隣りに座った。水で冷やされた夏の風が僕の頬をなぜる。その気持ちよさに目をつぶればまぶたを閉じてもわかる夏の日ざしが目をあけるようにうったえかけてくる。
「龍輝はお腹すいてないの？」
「やよはお腹すいた？」
聞きかえすとやよは首をふる。龍輝は上半身をおこしてやよの顔をじーと見る。やよはその視線に気づいて恥ずかしそうに顔をそらした。あの日からやよはじっと見つめると顔をそらしてしまう。やよにはないしょだけどその反応がおもしろくて龍輝はわざとやよを見つめる。ばれたら怒られるだろうか。そういう僕もやよの姿にまえ以上にドキドキさせられて困ってしまうこともあるんだけどこれもないしょ。龍輝のドキドキには性的なものがふくまれているときもある。健全な男の子が好きな子といる時はこんなものかもしれないがやよと龍輝のなかはそれ以上すすむことはない。
「やよが気にすることはないよ。それに、二人の時間がほしいってごてたのはやよだろ」
からかうように言われたやよは反論しようと思ったが、でもやめた。龍輝の言っていることにいつわりはない。実際こんな風に二人でいる時間をつくってもらえるのはうれしい。あの時、私は龍輝の

もうしでを断らなければいけなかった。でも、そんな意思とは逆の言葉を言っていた。いずれくる別れの時に龍輝の悲しみが少しでもすくないように、自分が泣かないでいいように私は別れを告げるべきだったのに現実は違う。

「ねえ、龍輝いつまでつづくと思う？」

やよは不安をそのまま口にだした。龍輝のそばにいるとやよが経験してきたどの時間よりも温かくて満ちたりている。そして、それとおんなじぐらい不安なのだ。温かで幸せな分はなれてしまう時の悲しみが耐えられなくなってしまう。私はずるい。いつまでも続かないことを龍輝に隠して龍輝と気持ちをかよわしてしまった。ほんとうのことを知っていたら龍輝は私をえらんでくれなかった。

「なにが？」

「ううん。なんでもないわ」

やよのようすがおかしい。龍輝はやよがふっと見せる陰のある表情が気になっていた。やよとの未来に生みだすものはなにもなくてもかまわなかった。そばにいてくれればなにも望まない。

「やよが僕にあきないかぎりつづくんじゃないかな。僕がやよにあきることはないから」

さっきまでの影は消えて恥ずかしそうにはにかんでいるやよが愛おしい。しかし、自分でも信じられない言葉を僕は言うようになった。きっと、やよのせいだ、こんな恥ずかしい言葉を言ってしまうのは。にぎりしめることのできない手に触れる。やよの顔をのぞきこめばやよは逃げていってしまった。僕はそのあとを追いかける。そのままじゃれあいながら二人で追いかけっこをする。やよが無邪気に笑いだすと龍輝もそれ以上に楽しくなって夢中になった。でも、息切れでダウンしたのは龍輝のほうで息をきらしてやよに言う。

「まって、やよ。もうだめ」

「龍輝、情けない」

「だってしかたないだろ。生身なんだから」

龍輝は言葉にだしてからその言葉のまずさに気がついた。やよが

生きているものと死んでいる自分との違いに心を痛めていたことを思い出す。なにかを言いつくろおうと僕は必死に頭をめぐらした。でも、思いのほかいい言葉はでてこない。龍輝が困っているとやよはふと笑った。

龍輝が言った言葉は私が気にしていたことをさしたものだった。その言葉がまったく気にならないといえば嘘になる。でも、もう悲しくはなくなったような気がした。だから、無理に笑ったのではなく自然と笑いかえすことができたのだ。龍輝と出会って知ったことはたくさんある。色のない世界に生きて家のために婚約をして死んだほうが楽になると思っていた。でも、家の名のために死ぬことも許されない苦しみから抜けだしたかった。そして今、龍輝に恋をしてちがう苦しみを知った。龍輝に会うまえはただただ時間が過ぎるだけのゆっくりとしたものがあっとゆうまに姿をかえて痛みをともないながら動きはじめた。

「龍輝は無神経ね。でも、許してあげる。なにがあっても私をえらんでくれたら」

「誰とくらべることがあるの？僕にはやよしかいないのに」

こうして僕たちはじゃれあいながら言葉を交わしていく。触れあえない僕たちには言葉を交わすこと、目と目で見つめあうこと、互いのことを理解しあうこと、二人の愛情がどこにあって、どういう風に表現しあうのか二人で探しあいながら互いへの気持ちを大切にする。普通の恋人たちのようにはできないけど、僕はそれでも幸せだった。やよからあのことを聞くまではほんとうに幸せだった。そして、もろい心は迷いをみせた。それがやよを傷つけてしまうとわかっていてもどうしようもなかった。

部屋の窓から足をだしてウサギのぬいぐるみをはさんで二人で座る。月もない濃紺の空が星の輝きを最大限にいかしている。その空はまるでやよの着物をそのまま空へかえしたような夜空だった。邪魔な明かりを消して部屋を闇にかえすと星がよけいにきれいに輝く。

「きれいね。星はいつでもずっときれいなままでずっといられるのね」
龍輝にとっては都会の夜空と田舎の夜空、二つの夜空を見て育ったからかやよの「ずっときれいなままでいられる」という言葉があまりピンとこなかった。都会の空ではたとえ月がなくても星はくすんでいて数も少ない。都会のほとんどの人が田舎にきて夜の暗さや星の輝き月の明るさに驚くだろう。
「やよはずっときれいな空ばかり見てきたの？」
「龍輝は違うの？空は私が生きていたときからかわっていないわよ」
「都会の星はあまりきれいじゃない。数も少ないし。だからここにくるんだけど」
やよは不思議そうな目で僕の話しを聞いている。龍輝はここが好きだった。ここは町とは違い空気も空も素直できれいだ。のんびりと時間が過ぎているここでは龍輝はいつも穏やかにつつまれているように感じる。
「空はおなじではないのね。見てみたいいろんな空をもっときれいな空もあるかしら」
「ここ以上の空はないよ」
濡れた頭から雫が顔をつたう。その不快さに水滴を手で拭うとふと思いついた。僕とやよはおなじじゃないから平行線のまま交わることはない。だったら僕がやよとおなじになれば触れあうこともずっと一緒にいることも叶うのではなのだろうか。でも、僕は思うだけでやめた。龍輝には両親や祖母、友達もいるのだ。祖父が死んだ時に悲しんでいる人たちがいた。もちろん自分だって悲しかったのだ。そんな悲しませるようなことはできない。
コンコンとノックがしたと思うと返事をまたずして扉が開く。開けたのは栄美だった。栄美は断りもなく部屋にはいると龍輝のうしろにたった。ドライヤーで乾かした髪からふわりふわりとシャンプーの香りがする。女の子らしくなったけど龍輝にとっては大切な妹のような存在のままだ。

「龍輝、そんなとこ座ってたらあぶないよ」
「ああ」
名残惜しげにやよの顔を見ると龍輝はベッドのうえに座る。栄美は龍輝のまえにたつと龍輝を見あげるように座る。栄美はあれからなにも言わない。それどころか少し態度がおかしい。これまではどこにいくにもついてきたくせにあまりついてこなくなった。そして、なんだかんだと言わなくなったのだ。まったく気にならないわけではないが、どうしてと聞くのもおかしいような気がしてそっとしておいた。やよに目配せをすると右手でトントンとかるくたたく。
（こっちにおいで）
やよは龍輝の意図を正確に感じとるとすました顔で隣りにくるとそっと座る。そして、彼女を見つめた。彼女はかわいい。私より素直でかわいい性格をしていると思う。自由で自分の気持ちに素直な彼女はやよにとって憧れの性格だ。彼女を見ていると龍輝の気持ちを知っていても心がざわつく。うしろめたい気持ちがそうさせるのか、彼女のひたむきな素直な心がそうさせるのか、やよにはわからないけど心がざわざわとざわつくのだ。
「龍輝は好きな子とかいないの？」
栄美のとっひょうしもない質問に一瞬、すになってしまった。それでも平静をとりもどすとなんでもないふりをして「なにが」とかえした。セリフが平静をとりもどしていないのが気になるがなんとかかえす。
「女の子よ。龍輝いるでしょう、好きな子。会わないあいだにすごくかわったから、龍輝」
「そうか、そう言う栄美はどうなんだよ」
問いつめるように言われて龍輝は焦ったように言った。なんだか気恥ずかしいのだ妹に女の子のことを詮索されるのは。ましてやよが隣りにいるのにそういうことをつっこまれて僕は居場所がなかった。
「いるわよ、好きな子。ずっとかた思いしてるんだから」

「ふーん」
僕はこんな風にしかかえせなかった。こんな時どうかえせばいいのだろう。誰か教えて欲しい。友達と恋の話しやもちろん年相応のエッチな話しもするけど、妹とはしないんじゃないかな、一般的には。僕の動揺をやよは見ぬいていて不安そうに僕を見ている。そして僕はこのあと、頭をぶちぬかれたような衝撃をうける。その衝撃は完全に僕の予想をこえていた。
「龍輝の好きな人はやよさんて言うんでしょう。一人で外出したがるのはやよさんに会いにいくため。熱にうなされながらずっと呼んでたわよ・・・・・・ずるいなやよさん私のほうが龍輝のこと好きなのに」
瞳孔を開いてしんそこ驚いている龍輝とはぎゃくにやよは落ちついていた。私ははじめて彼女を見た時から気づいていた。ああ、この子は龍輝のことが好きなんだろうな。そして、龍輝と楽しそうにするたびに心がざわついた。そしていま不安は具体的な姿をあらわして私のまえにたちはだかっている。なにも言わない龍輝が怖かった。そして、彼女は続けてこう言った。
「やよさんとつきあっているんでしょ。龍輝、わたし妹じゃないわ。女の子なのよ、龍輝のことが好きな女の子なの・・・私のこと考えて、お願い・・・」
龍輝は無言だった。なにを言えばいいのかわからない。栄美の目があまりにも真剣でとても冗談とは思えない。妹のような栄美を女の子として見るのは龍輝にはたぶん無理だ。まして、やよがいるのに栄美をうけ入れることなんてできない。でも、栄美を傷つけることも龍輝にはできなかった。栄美もやよもなにも言わずに龍輝を見ている。龍輝は指一つ動かすことも困難に思えた。何時間たったのか、おもい沈黙が永遠に思えた時、栄美は不意に顔の緊張を解くと部屋をでていった。
僕はやよのほうに振りむくこともできずにいた。やよもなにも言わないし龍輝の目を見ようともしなかった。そのまま気まずく何分

も過ぎる。そのおもさに耐えられなくなったのかやよが口を開いた。
「栄美さん本気よ」
やよの言葉がおもたく心に響いた。やよはどう思っただろう。聞きたいが聞けなかった。会話する力すら残っていないのか僕はおき物のようになっていた。やよの表情は見なくてもわかっている。きっと困惑しているに違いない。僕はどう答えればよかったのか、自分に問いかける。僕がなにかを言えば確実にやよか栄美どちらかを傷つけてしまう。
「龍輝は優しいからなにも言えないでしょう。私、龍輝に隠していることがあるの。それからきめてあげて」
「なに？」
思いもよらないやよの言葉に龍輝は抜け殻のように聞きかえした。やよにはもう隠すことなんてできなかった。あんなに正々堂々と龍輝にぶつかっていった栄美さんの姿を見てこそこそと隠れるようなことできない。龍輝はいまのままならきっと私を選んでくれる。それは自信があった。でも、私が隠していることを龍輝に伝えたらどうなるだろうか。栄美さんを選んでしまうかもしれない。きっと私は選んでもらえない。自分のすべてを相手にさらすことは怖い。
やよの言葉に龍輝はそこしれぬ怖さを感じていた。やよもなにかを感じて震えている。空気を伝わる緊張が龍輝をその場から逃げるように忠告しているようだった。逃げたくても体がその場にへばりついて動けない。龍輝はやよの次の言葉をまつ。やよはさっきまで栄美が座っていたところへ座るとまっすぐに龍輝の目を見る。そのまっすぐな視線は僕にも覚悟をきめるように迫っているようで龍輝は息をのむ。
「私、龍輝といっしょにはいられないの」
なによりも衝撃的な言葉に龍輝は言葉もでない。そのショックすぎる言葉は龍輝の思考能力まで停止させた。なにもできずにやよのまっすぐな瞳にくぎづけられる。やよの瞳には迷いもためらいも感じられない。いっぽう僕は迷い、混乱し頭も心もぐちゃぐちゃで逃

げてしまいたかった。そのさきにでてくるやよの言葉なんて聞きたくない。それでもやよはゆっくりと唇を動かした。その動きをただ見ていた。

「最近よく眠るでしょう。おきると少しずつ生きていたときのことを忘れているの。きっと龍輝のことも忘れてしまうわ・・・私、生まれかわるみたい」

なにも言わない龍輝に耐えかねて瞳をそらそうと思ったが、やよはそうしなかった。龍輝からも自分からも逃げてしまうように感じたからだ。逃げないときめたのだ。すべてをうけいれる覚悟もした。もし、龍輝が自分を選んでくれなくてもかまわない。もちろんきらわれたり責められたりするのはつらい。でもそれだけのことをしたのだ。

やよが僕のまえからいなくなる。僕のことを忘れてまったく知らない誰かになって僕のまえから消えるのだ。僕がどんなにやよといっしょにいることを望んでもそれは叶わないとやよは言った。あの時それを知っていたら僕はどうしたのだろうか。やよはそばにいて欲しいと望んではいけない相手だったのかもしれない。

「なんでいまさら・・・・・言わないままでよかったのに」

力なく呟かれた言葉はやよの心をしめつけた。責められてもしかたないのだ。自分のことだけを考えてあの時なにも言わなかったと思われてもしかたない。たしかに自分のことをまったく考えていなかったとは言わない。栄美さんに龍輝をとられるのがいやだった。栄美さんが龍輝のことを本気で好きなのははじめから知っていたし、龍輝も大切にしていることはわかっていた。だから龍輝が好きだと言ってくれた時どうしても言えなかった。

まっすぐに見つめていたやよの目が少しふせられる。龍輝は自分の言葉でやよが傷ついたと反射的に思った。でも、いつものようにやよをなぐさめる気にはなれなかった。別れてしまう時が怖かった。しかも、二人の思い出を忘れてしまうのだ。もし、生まれかわったやよと運よく出会えてもやよはなにも覚えていない。自分だけが思

い出をもっているのはつらすぎる。
「栄美さんがまっすぐで言わずにはいられなかった。どちらを選んでくれてもかまわないから」
やよは言いきると龍輝に背をむける。これいじょう龍輝と顔をあわせていることはできなかった。涙がでそうになるのを必死に我慢する。ここで泣けば絶対に龍輝は公平に選んでくれなくなる。龍輝はほんとうに優しい人だから。栄美さんを選んでくれればいいと思った。自分では龍輝に未来をあたえてあげられない。でも、栄美さんは龍輝にたしかな未来をあたえてあげることができる。私が龍輝にあげられるものは別れる時のつらさと悲しさだけ。龍輝が好きで好きでたまらない。こんな切ない苦しさをいままでどうして知らずにいられたのか理解できないほどに好きなのだ。どうして初恋の相手が龍輝だったのだろう。龍輝いがいならこんなに思いがつのらなかったかもしれない。
龍輝はやよがなにを考えているのかわからなかった。私を選んでと言われるのなら理解できる。いや、そう言って欲しいのかもしれない。僕はやよのことが好きだしそばにいて欲しい。やよが僕の気持ちをうけいれてくれた時にこれでやよとは離れることがないとへんな安心感をいだいていたのだ。なにをどう考えていいのかわからない。栄美が僕のことを好きでやよが僕から離れていく。やよを選んでもやよをひきとめるすべが龍輝にはなかった。栄美を選ぶことはできない。だって、やよのことを思いながら栄美とつきあうことなんてできるはずがない。栄美を傷つけるからとかではない。自分勝手な思いなのだ。栄美とやよとではあまりにもタイプが違う。これがもし似ていたなら僕はやよと離れる苦しさを栄美でまぎらわそうとしただろう。やよがそっと消えた。そのあまりにも空虚な感じに耐えかねて誰かに呟くこともなく言った。
「一夏の恋なんていらなかった」
一夏の恋を楽しめるほど大人ではない自分がいやだった。そして、初恋の相手が幽霊の女の子だったことを後悔していない自分が少し

うれしかった。叶わない、時間がきめられた恋が龍輝の心をしめつける。望むものが手にはいらないもどかしさや悔しさを感じていたのかもしれない。僕のそばにいて欲しい。それ以外なにも望まないから、神様がいるのならこのままやよを僕のそばにおいて欲しいとなんども願った。

龍輝のところにいかなくなってはや三日がたっていた。もう、生きていた時のことはほとんど思い出せなくなっている。でも、そんなことはどうでもいいことだ。龍輝がもう答えをだしているかもしれないが、たしかめにいくのが怖かった。逃げないときめたのになにもできずにただ龍輝と過ごした場所にいる。もし、このままここでなにもしないでいれば龍輝の答えも聞かず、なにもかも中途半端なまま龍輝と完全に離れてしまうかもしれない。中途半端な自分もいまの状態もいやだったが、龍輝に会いにいく勇気がなかった。

それでもめめしく龍輝との思い出をおうようにこの場所にいつづけている。はじめって会ったこの場所で龍輝をまっているのだろうか。自分にもわからない。どうせこの夏がおわれば龍輝と過ごした時間さえも忘れてしまうのに。

誰かの足音が聞こえる。やよは少しびっくとすると不安げに足音がしたほうを見る。龍輝だと思うとすごく鼓動がはやくなった。不安でしかたない。あまりの不安に逃げだしそうになる体を必死にその場に繋ぎとめながらちかづいてくる足音をまつ。永遠だと思えるくらいの息苦しい時間とともにあらわれたのは栄美さんだった。栄美さんが暗い顔で水面を見つめている。なんだかその姿は覇気がなく違う意味で不安になった。心配しながら見つめていると、きゅうに川のなかにはいっていく。やよは栄美さんが自殺をしようとしていると思って慌てて栄美さんの体をおさえつけにいこうとする。しかし、栄美さんに何度しがみついてもその体をすりぬけていくだけ。必死になっておさえつけようとやよがもがいているとふと栄美さんの動きがとまった。

「私、龍輝にふられるわ。だって、龍輝ぜんぜん私のこと考えてくれないんだもの・・・やよさんはずるい。突然あらわれて私から龍輝をとってしまうんだもん」
泣きながら叫びだした栄美さんに心がしめつけられる。もし、栄美さんとおなじ立場なら耐えられない。しかも自分は龍輝のことを忘れてしまうのだ。そんなこと許せない。いまさらながらに自分の愚かさをくいている。言わなければよかった。あのまま消えていけばよかった。龍輝と会わなければよかった。いろいろな後悔が頭を駆けめぐる。泣き続ける栄美さんを見ているとやよも涙が流れてくる。栄美さんの心の叫びを聞きながら私は静かに泣いていた。
「私のほうが龍輝のこと好きなのに・・・・・・やよさんのことばかり考えてる。私、やよさんが羨ましい。おなじ家にいるのがつらいの、やよさんのことばかり考えている龍輝をずっと見ているのはつらくてしかたない・・・・・・はやく、ふってくれればいいのに。龍輝のそういう優しさがすごくつらい」
二人でこうして時間も忘れて泣き続けた。さきに泣きやんでいたのは栄美さんで私は静かに泣いていたせいか、まだまだ涙が溢れだしてくる。こうして栄美さんの想いを知れば知るほど悲しくて切なくて苦しいそして、知れば知るほど龍輝への思いが募っていく。どうじに自分のみにくさを知っていった。龍輝を思えば思うほど誰にもわたしたくないそれがたとえ短い時間であっても。龍輝と離れるのがつらいだけなら龍輝から離れることができた。龍輝のことを考えてみをひくことができた。
この恋が初恋でかったらこんなに苦しまなくてもよかったのか。それとも恋とは苦しいものなのか。他の人が傷ついてもゆずれないものが恋なのか。やよにはわからない。でも、他の人が傷ついても、自分が傷ついてもそして龍輝が傷つくことがあってもゆずれない思いがあることをやよは知ってしまった。疲れて泣きやんだらなぜだか気持ちは晴れやかで思いが固まって覚悟もきまっていた。傷ついてもいい最後の最後まで、龍輝と別れるその時までそばにいたい、

龍輝に自分だけを見ていて欲しい。そして、思い続けていきたい。
「ごめんなさい」
やよはおなじようになにかをふっきった顔をしている栄美さんに謝るとまっすぐにまえを見つめる。もう、したをむいてたちどまっている時間もない。そして、なによりそんなしたをむくような恋をしたくはなかった。傷ついても傷ついてもまえをまっすぐにむいていられる恋がしたい。そんな強い恋がしたいと思った。そうでなければ、いけないと思った。龍輝が大切に思ってくれるから。龍輝が大切だから。
「ありがとう」
栄美さんが思いもよらない言葉を私のほうを見つめて言った。見えているはずも聞こえているはずもない栄美さんがまっすぐに私を見て言ったのだ。そして、その言葉は不思議と温かくて私を勇気づけてくれた。その気持ちを素直にうれしく思う。そして、その気持ちをこめてやよも伝える。
「ありがとう」
そして、やよは龍輝のもとへいそぐ。龍輝から答えを聞くために。龍輝がもし栄美さんを選んだとしてもそばにいられるように。龍輝に自分の気持ちをうけとめてもらうために。栄美さんがまっすぐに龍輝と私を見てくれたように私もまっすぐに見られる人になりたい。
（もう、逃げたりしない）
強く心に思いながら龍輝のもとへ駆けていく。龍輝にほんとうのことを打ち明けたときもじつは逃げていた。自分を選んでもらう覚悟がなかったのだ。龍輝が自分を選ばないようにほんとうのことを打ち明けてしまった。逃げないときめたと思っていたのにじつは逃げてばかりいたのだ。怖かった自分を選んでもらうことが龍輝のことを考えているふりをしてじつは自分のことしか考えていなかったのだ。まだ、遅くないと頭のどこかで誰かが言っているようだった。もし、もう手遅れでも龍輝の気持ちも龍輝へむける自分の思いもすべてさらけだして龍輝のすべてをうけいれたい。うけいれてもらい

たい。

龍輝はここ何日も眠れずにいた。栄美の告白はやよの告白ですっかり消えてしまっていた。僕には栄美を選ぶことはできなかった。それはたとえやよがいなかったとしてもかわらないだろう。栄美は僕にとってやっぱり大切な妹のほかにはありえないから。でも、栄美にそのことを伝えるエネルギーはいまの僕にはなかった。はやく栄美のためにも答えを伝えなくてはならないのにいまの僕にはやよのことしか頭になかった。やよを選ぶこともできない。やよと離れてしまうことを考えるとどうしてもやよを選ぶ勇気がなかった。これ以上やよのそばにいてやよを好きになればなるほど別れる時の苦しさがふえてしまう。やよとの思い出が美しくて幸せであればあるほど一人で抱えておくのは切なくて苦しい。

朝も昼も夜でさえもやよのことが頭をちらつく。やよのことで頭がいっぱいな龍輝には栄美と顔をあわせることさえなんでもないような気がした。やよが自分から離れていく、どうすればいいのかわからない。やよを選んでも自分たちに未来はない。他の恋人たちのように別れても思い出を共有することもできないのだ。そんなひどいことがあるだろうか。好きで好きでたまらない人が自分を忘れてしまう悲しさが僕の目のまえによこたわっている。

母さんたちは栄美と龍輝の様子がおかしいとさりげなく僕に「どうしたのか」と聞いてきたが僕にはその問いに答える力もない。「なんでもない」とかえすのがやっとだった。一人で抱えるには辛すぎて思わず母さんたちに口を滑らせてしまった。

「大事な人いなくなるとしたらどうする？」

いひょうをつかれたような顔を一瞬したが、すぐに龍輝の言った言葉を真面目に考えだしてくれる。しばらく考えこんだあと母さんは真面目な顔で言う。

「自分が納得できるまで抵抗するかしら」

母さんの返答に興味をもった僕はまた聞いてみる。たしかにこの

ままわかれても納得いかないしそばにいるだけでも納得できそうにない。でも、やよが新しい命をうけることをとめることはできない。
「相手のためにならなくても？」
「難しいわね・・・・・・たくさん思い出をつくるかな。離れても寂しくないように」
「相手が覚えてくれてなくても？」
へんなことを聞いてしまったと思ったけれど互いに覚えていなければ思い出なんて意味がないと思う。どんなにすばらしい時間を二人で過ごしてもやよは忘れてしまうのだ。母さんは少し困惑気味だったがなんとか答えをみちびきだそうとしてくれた。
「覚えていないて言うのがよくわからないけど、思い出はいつも自分のためにあるものだとお母さんは思うけど。もちろん共有できればもっといいけど、つらい時や寂しい時にいい思い出は励ましてくれるじゃない」
思い出が励ましてくれる。思いのほかその言葉は僕の心に落ちてきてそっといすわった。自分を慰めるための思い出。そんな風に考えたことなんてなかった。二人で共有できないことばかりなげいていた思い出が自分を励ますためのものになるなんて。でも、そう考えると心は驚くほどかるくなる。心がかるくなったとどうじに体までかるくなったような不思議な感じがした。
このまま離れるなんてつらくてできない。でも、残りの時間をたくさんの思い出のためにつかうのは切なくて苦しいけどこのまま離れてしまうよりはずっと楽だった。やよが好きでやよに夢中なこの気持ちを誤魔化さずに伝えることそれが僕にとっていちばん幸せなんじゃないだろうか。気持ちをあいまいにするから思い出までもつらくなる。思い出は優しくてあたたかいものでありたいし、そうであってほしい。
そのために僕がしなければいけないことそれは、栄美をきちんとふること。栄美のことをないがしろにしたままやよのそばにいることはできないから。栄美の真剣な気持ちをないがしろにしてやよの

ことばかり考えていた。栄美と毎日かおをあわせても気まずくないなんて、なんて失礼ことをしたんだろう。真剣な気持ちには真剣な言葉でかえさなくてはいけないのに。栄美を探しにいくためにでていこうとする僕に祖母ちゃんが言った。

「龍輝、自分の気持ちに正直ならいいことがあるよ」

自分の気持ちに正直でいたい。どんな結果がまっていても自分の心がきめたことなら後悔しなくてすむ。それだけでもじゅうぶん意味がある。栄美と僕のあいだにもやよと僕とのあいだにもゆずれない僕の思いがあった。栄美は大切な妹だということ、やよは誰よりも特別な女の子だということ。この思いは僕のなかでつらぬかなくてはならない大切な思いだ。

龍輝は栄美を探しに外にかけだす。栄美に伝えること自分の気持ちを真剣に伝えることそれが栄美にたいして、いまできる精一杯の謝罪だ。その儀式をしないことには自分はやよにむきあえない。

しばらく探しまわって栄美を見つけた時には幾筋も額から汗が流れていた。栄美は川にでもはいっていたのだろうか髪も服も靴までも濡れていて髪からはぽたぽたと水が滴り落ちている。

「栄美、話しがある。家に帰ろう、風もひくから・・・・・・」

「・・・いいから、ここで言って。いまならショックも少ないと思うから・・・・・大丈夫」

そう言った龍輝に栄美は首を静かに振るとしっかりとした口調で言った。そのあまりにもしっかりした口調は僕の知らない栄美だった。僕は一瞬、目を閉じると栄美にはわからないようにそっと息を吐く。そして、栄美の目をまっすぐに見つめる。栄美も僕の目をそらすこともなく見つめていた。

「栄美から好きだと言われて正直困った。栄美のこと一人の女の子としては見れないから・・・・・・・それに、栄美が言ったとおり好きな子がいてその子のことばかり考えてる。だから・・・」

「謝らないでね」

「ごめん」と言おうとした僕の言葉を栄美がさらっていった。ど

うすればいいのかわからなくてかえす言葉をなくした僕に栄美は言った。話しているあいだの栄美の顔はやっぱり僕の知っている栄美の表情とは違った。

「謝られたら惨めになるじゃない。だから謝らないで・・・・龍輝は優しいからいろいろ考えてくれたんでしょう。ありがとう。でも、もっとはやく言って欲しかったな・・・・・・」

龍輝はその言葉に胸が苦しくなった。ぎゅうっと締めつけられる感覚に呼吸がしにくい。傷つきながらも「ありがとう」と言った栄美の言葉は龍輝に疑問をなげかける。どうして栄美じゃいけないのだろうか。どうして、やよを選んでしまうのか。心が求めることは頭と違い合理性にかけている。けど、かけているからこそ大切なのかもしれない。

「栄美、僕からもありがとう。こんな僕を好きになってくれて」

もうしわけない気持ちがこみあげてくる。自分がもっているのは優しさではないと思った。ただの優柔不断なだけだと。優柔不断な僕の心のせいで栄美もやよも必要以上に傷つけてしまった。栄美は少しも表情をかえなかった。しゅうし表情を崩さない栄美になんだか強さみたいなものを感じて不思議と安心を感じていた。

「かえろうか」

龍輝は栄美に言った。しかし、栄美は首を振ると「先にかえって」と言った。僕はそれ以上なにも言えなくて栄美に背をむけた。栄美を残してそこから離れた。僕はこのあと栄美が泣いていたことを知らない。

部屋に龍輝の姿はなかった。龍輝のかわりにうさぎのぬいぐるみがいる。うさぎさんはやよをまっすぐに見つめていてなにか言いたげに感じた。龍輝をてばなせない自分に気づいたとたんに龍輝に会いたくて顔がみたくてたまらなくなった。龍輝のいない空間はどこにいても自分にはしっくりこなくて馴染めないように感じた。自分の感情のあまりにも勝手なことにあきれるくらいだ。でも、その気

持ちは偽りのない自分の気持ちなのだ。それだけがたしかにいまここにある真実だった。

明るい日が差しこむ部屋のなか龍輝をまった。ずっとずっと龍輝をまつ。龍輝がほんとうの自分の家に帰ってしまったなんてなぜだか思わない。不思議なことだけれどほんとうに思わなかったのだ。龍輝のそばにいたい、そばにいるだけでいいから、この瞬間の気持ちを龍輝に知ってほしい。だから何時間でも何日でも自分に許されるかぎりの時間をここで過ごしたい。

「いっしょにまっていようね」

やよはうさぎさんにそっと声をかける。うさぎさんがうなずいてくれたように感じてやよは少し心強くなった。このうさぎさんはいつでもやよの味方でいてくれたように思う。そしていまだって誰よりも応援してくれている。机におかれた時計がこくこくと時間を刻んでいく。それでもやよは龍輝をじっとまった。自分の気持ちを伝えるため。

龍輝はあのあとすぐにかえる気に離れなかった。自分が大切にしている人を傷つけた苦しさと自分の気持ちを伝えることができた安堵感。この気持ちがどうしても家にかえることを拒んだのかもしれない。だからバス停のベンチまで歩いた。ベンチに座ったままどれぐらい過ごしたのだろう。正午の激しい暑さは少しだけなりを潜めたようだ。じりじりと肌を焦がす太陽がなぜだか心地いい。そっと頬に風が触れて前髪を揺らしていく。その風に優しくおこされたような気になって龍輝はそっと目を開けた。寝ていたわけではなかったが、とても目を開けていたくなかったのは事実だ。

風が吹いたほうを見る。風が吹くそのさきには龍輝の家がある。なにも考えずにただそのさきを見つめる龍輝の心に歌が聞こえた。澄んだ声のソプラノは懐かしささえあった。聞こえるはずのないその歌声を運んできた風は龍輝をみちびくように優しく吹きつづける。優しく澄んだ声をだせるのはただ一人、彼女しかいない。龍輝が誰

よりも大切にしたくて、誰よりもいっしょにいたい人。彼女が呼んでいるような気がして龍輝はたちあがった。そして、まっすぐに駆けていく。風のさきにいる大切な人のもとへ。

龍輝をまった。目を閉じれば龍輝のくれたものがぎっしりとつまっている。それらは必ず忘れてしまうものだけれど、大切で大切でしかたないもの。それをてばなすことは自分にはできなかった。忘れる運命にあるとしてもできるだけあがいて覚えていたい。龍輝の気持ちを教えて欲しい。たとえそれがいかに残酷で悲しいものであったとしても聞きたくてしかたないのだ。

「そばにいられるならなんだっていいわ」

呟いてやよは不安になる。もう顔も見たくないと言われたら私はどうすればいいの。その不安をうさぎさんにむけるとうさぎさんは優しく「大丈夫だよ」と背中をお押してくれた。その時、窓から優しく風がおとずれる。風はあたるはずのない、やよの髪を揺らした。その不思議な風はなぜか龍輝を思わせる。龍輝はいつだって風のように優しくやよの心を揺らした。その揺りかごのような揺らめきはいつか忘れてしまうものだけど、心には残り続けると信じたい。

とんとんとん。不意に響く足音。やよの心を揺さぶるその音はまるで風が運んできたようだ。少し荒いその足音にどきどきと心臓が反応する。けっして激しいものではないけどやよの心から落ちつきを奪っていった。頭で考えなくても体が心臓がわかっているような不思議な感じがした。でもけっしてやよを不快にさせることはない。

（・・・・龍輝・・・・）

足音がちかづくに連れて強く強く何度も何度も呼んだ。そして、足音はぴたっと音をとめてしまう。かわりにやよの耳に響いた音はガチャっとゆう乾いた音だった。その音はゆっくりとおもい扉を開ける。やよは不安と期待、恐怖と勇気そんな相反する感情がせめぎあうなんとも言えない感情を抱きながら扉のむこうにいる人物をまった。扉が完全に開いたそこにたっていたにはやよの心の奥にいる

人だった。心の大事なところにいる人はどうしても離れることができない人。
二人の目線が繋がる。そのまま互いの名を呼びあうこともなく見つめたままゆっくりと時間が過ぎる。なにを失くしてもこの人があたえてくれるものは覚えていたい。体にも頭にも心にも刻みつけて火傷のように永久に消えないで欲しいもの。そんな大切な人をやよはまた自分の身勝手さで傷つけてしまう。でも、心が彼を求めて苦しくて泣いている。そして、やよにはその心をいさめることはできなかった。
「やよ」
思いのほか優しく呼ばれた自分の名前に涙がでそうになる。すべてを許されたような錯覚さえおこさせる優しい声にやよは思いが溢れた。じつはどう自分の気持ちを伝えればいいのかわからなかった。そばにいて、私を選んで、龍輝のほんとうの気持が知りたい、栄美さんにも誰にもゆずれない、きらいにならないで、忘れたくない、好きです、いろんな感情がやよのなかにあってどうすればいいのか、どう伝えればいいのかわからない。
「龍輝、栄美さんを選ばないで、そばにいたい、きらいでもいいからそばにいて。離れても忘れないで、私を選んで、私だけをみていてほしい、でも、私は忘れてしまう。忘れたくない、離れないで、傷つけてもそばにいたい。ずっと、ずっと・・・・・好きよ」
龍輝はなにも言わず。やよの言葉を聞いていた。やよの思いをずっと聞いていた。どれもやよのほんとうの気持ちで僕はぜんぶうけとめてあげたいと思う。いままでいちばんやよの心に触れているような感じがする。やよの頬に触れるとあの日と同じようにやよの温もりが掌に伝わってくるきがした。
「やっと僕のまえで泣いてくれた」
龍輝のその言葉にやよは自分が涙を流していることに気がつく。そして、いつのまにかうつむいてしまった顔を龍輝の手がそっとみちびいた。龍輝の目が優しくて優しくてどうしてこんなに優しい目

をしているのだろ。龍輝の思いがやよの頬に伝わってやよの心を自然に静めていく。
「栄美にはことわってきたよ。僕のお願い聞いてくれる」
龍輝の言葉にやよは少し不安になった。もうちかづくなと言われたらどうしよう。そんな不安が心に影を落とした。でも、やよにはもうなにもなかった。自分のすべてをさらしたやよにはもうあながうすべは残されていなかった。
僕が望むもの。はじめてせつに願うもの。それはやよとの思い出だった。やよといっしょにいるという願いはやよを傷つけてしまう。だから、最低限ゆずれないもの。やよとの思い出がほしかった。どんな思い出でもいい。楽しい思い出、つらい思い出、切なくあたたかい思い出、傷つけあう思い出、どんな思い出でもよかった。やよのそばにいつづけることができないなら僕はやよの思い出をそばにおきつづける。思い出は僕に優しいだろうから。
「僕の願いはひとつ。思い出をください」
やよはなにを言われているのかわからなかった。だから、なにもいえずに龍輝の顔を瞳を見つめる。どうすればいいのかわからなくて困惑していると龍輝は言葉をつなげて言う。
「やよとの思い出をちょうだい。やよと僕の二人の思い出が欲しい」
「でも、忘れるわ。私、忘れてしまう」
涙を溢れさせながら答えるやよの瞳を見る。そして、心の中でといかけつづけた。その涙はうれしい涙、それとも悲しい涙。やよの必死の言葉に龍輝は心をこめて言った。
「やよが忘れても、僕が覚えている。笑った顔、怒った顔、楽しかったこと、悲しかったこと、僕に見せてくれた心のすべても、思い出のなかにしまって覚えてる」
龍輝の教えてくれたものはいままで誰も教えてはくれなかったものばかりだった。そして、最後の最後まで龍輝は私にいろんな失くしてはいけないものをあたえつづけてくれるのだろう。龍輝がこんな風に言ってくれるなんて思っていなかった。想像をぜっする龍輝の

気持ちにやよの心は満たされていく。
　龍輝はやよの気持ちを言葉にしてほしかった。言葉にすることでやよの気持ちが手にはいるような気がするからだ。言葉にしてもらうことでうれしいことってたくさんあると思う。僕はやよの声が言葉が聞きたかった。やよの濡れた黒い瞳を見つめる。やよが言葉にだしてくれるまで。でも、やよは涙を流すばかりで言葉にしてくれない。じれてきた僕はやよに言った。できるだけ優しくつつみこむように。
「願いは叶えてくれる？」
「わかっているでしょ」
　涙に濡れた顔で微笑みながら言ったやよの顔はきれいであたたかかった。心がやよで溢れていく。やよが僕を満たしていく感覚に酔いながら僕はやよの言葉を求めた。やよの表情や声、言葉やしぐさでもっと僕を満たしてほしい。
「きちんと聞きたい。やよの言葉を聞かせてよ」
　龍輝がこんなに求めてくれることにやよは喜びを感じている。求められているとはじめて自覚したのかもしれない。どうしていままで感じなかったのだろうかと不思議に思うくらいだ。龍輝はいつでも自分を求めてくれていたに違いない。私は少しでもこの状況をながくあじわっていたかった。でも、龍輝が切ない目で見つめるからこれ以上は耐えられない。自分が満たされていることを教えたい。龍輝に喜んでほしい。龍輝が切ない目で私を見るから。
「龍輝のいちばんの思い出にして。忘れないでずっとずっと私のすべてをやきつけて」
　龍輝はそれを聞くとやよの体をひきよせるに抱きしめた。うれしい気持ちをやよを抱きしめる腕にこめる。うれしくてうれしくてどうにかなってしまうそうだ。どうしてこんなに魅了されるのだろうか。きっとやよと僕はもっともっと昔から繋がっていたのだと思った。ただ互いに忘れてしまっているだけで誰よりも強く深く繋がっていたのだろう。

「ありがとう、ありがとう」
龍輝は何度も何度もやよに言いつづけた。「ありがとう」の言葉にたくさんのあたたかな思いや切ない思い、愛おしい思いをのせて、大切にやよにとどけるように。
やよは龍輝のくりかえされる言葉にとめどない切なさと愛おしさやあたたかさが溢れて心を満たしていく。心から溢れそうになるそれらをやよは心のなかに心の奥にしまっていった。いつか忘れる日がくるとしても心の奥にしまったものはきっとなくなりはしないだろうから。
手をにぎることも抱きあうこともできないけれど龍輝の思い出になりたい。誰よりも特別な思い出になることができたらどんなに幸せだろう。龍輝の肌やおもさを感じることはできないけでど心で触れあっているからあわせたところから切ないあたたかさが伝わる。記憶をなくしたとしても忘れることのない感覚が二人のあいだにはあった。

4

僕とやよはのこされた時間を特別にかざりたてたりつくろったりせずいつもの自然な二人の時間を過ごそうときめていた。へんにかざりたてた時間を過ごしても互いの心になにものこらないように思うからだ。僕がこれからやよと過ごすのこりすくない時間は僕にとってなによりも優しくてあたたかくて切ないだろう。やよとも「特別なことはなにもしないですごそう」と約束した。やよも「そのほうがいい」と言ってくれた。

二人で窓辺に座り窓を開けて空を見ていた。燃えるような赤い赤い太陽と太陽にほてらされて淡く色づいている空がきれいで僕たちは目がはなせないでいた。きっとこの景色も僕のなかに思い出として優しくきれいにのこっていくのだろう。

「ひさしぶりにデートしよう」

呟くように言った僕の言葉にうれしそうに笑うやよの顔がまぶしい。僕はその顔が大好きだ。やよの笑った顔、うれしそうな顔、優しい顔、無邪気な顔がうれしくて甘くしびれそうになる。そして、怒った顔、悲しそうな顔、泣いて頬が濡れた顔が僕の心を切なく苦しめる。やよのすべてが僕は好きでやよのすべてが僕の心を支配しているようだった。

「ゲーセンで踊って、喫茶店でお茶と甘いものを食べてそれから町をぶらぶらしていろんなものを見るの。龍輝の好きなものをもっと教えてちょうだい。もっともっと龍輝のこと教えてほしい」

「僕にも教えて、もっとやよのこと。やよが好きなものやよがきらいなもの、やよが楽しいこと楽しくないこと。ささいなことでもいいから」

僕たちは普通の恋人同士のようにあまい言葉をささやきあった。僕たちは普通の恋人たちよりも思いやりの言葉やあたたかい言葉をささやきあった。僕たちはこの過ぎていく一秒一秒を誰と過ごすよ

りも大事にしてなによりもかけがえなく思って過ごした。いつやよがいなくなるかもしれない不安定な時間のなかを僕たちは手を繋ぎ互いによりそうことで歩むことをきめたのだ。
「明日いくの？」
「やよが今すぐにでもいきたいなら今からでもいいけど」
「もう無理よ。日もかたむいているもの」
やよはうれしそうに笑いながら言った。僕もつられて顔の筋肉がゆるむ。ほんわかした時間が二人に流れているのを感じて僕はあたたかな気持ちになった。
「じゃあ、明日の楽しみにしようか？」
「そうしましょう」
僕たちは暮れていく橙色の太陽と太陽を追いかけるように濃くなっていく蒼い空を並んで見ている。太陽が隠れてしまうと空も僕の部屋も暗くて落ちつく闇が支配した。でも、やよだけはきらきらと輝いて見えて僕にはまぶしい。やよが僕によりかかってきたけどまったくおもさはない。でも、僕は満足していた。愛おしい思いは触れあわなくてもつもりつもって僕の心に深く深くその存在を刻みつける。
やよが失ってしまった記憶はどこへいくかはわからないでもそれでも僕たちは時をかさねて思い出をつくっていく。僕との思い出をやよが失っても僕がもちつづけることでやよはきえることはない。僕はもういましか見ていない。一秒一秒過ぎていく時間のこの瞬間、瞬間を見ている。やよとの時間が僕にとってすべてであるようにやよもおなじように感じておなじように大切でおなじように見ていると思いたい。僕はやよが好きな気持ちをとめられなかったし、いまもとめることはできない。僕が感じているこの気持ちが恋ではなく愛ならどんなにうれしいだろうか。教会で誓うよりも神聖で潔白な愛の誓いを僕はやよに誓うだろう。これが愛ならば僕はまたやよに会えるような気がした。僕にはやよがはじめての相手だから恋か愛かもよくわからない。恋と愛の違いもわからない僕はやよへの気持

ちが愛であればいいなと思った。恋よりもおもい気持ちを彼女にささげたかった。

ひさしぶりのデートにやよはいまからドキドキしていた。いま夕飯がやっとおわったところなのに。うれしさで顔が自然とほころぶのが自分でもわかるからおかしい。龍輝はそんな私の顔を見ている。その目があまりにも優しいから恥ずかしいようなうれしいようなとても不思議な感じで少しいたたまれない。でも、龍輝のそばにいたい。

龍輝のお母さまはみんなが夕食を食べおわると食器をかたづけて龍輝がお風呂にいっているあいだにお茶の用意をしていた。龍輝がお風呂からあがるとお母さまは慣れた手つきでお茶の用意をしていく。家族でお茶を飲みはじめる。もちろん、栄美さんもいっしょだ。龍輝はあつい紅茶に氷をいれると椅子に座った。そして、お菓子をつまみながら明日のことを話しはじめる。私はあいている椅子に座っておなじようにお菓子をつまんで龍輝の紅茶をもらう。おなじ茶葉なのにお母さまのいれたほうがおいしかった。

「明日、買い物にいってくるから」

龍輝は平然と言ったが聞いていたやよのほうはなんだか気恥ずかしい。気恥ずかしさと少しうしろめたい気持ちがやよの心を少しばかりゆらした。だって、明日はデートをするのだ。その許しをもらうようでドキドキもした。お母さまはグラスから唇を離すと龍輝に言った。

「そう、それじゃあ栄美ちゃんおくっていってあげて」

「え？」

龍輝が不意をつかれたような声をだした。私もおなじように驚いたけれど言葉が浸透するにつれてなんだかほっとしてしまった。龍輝が私を選らんでくれても栄美さんがいるとなんだか落ちつかなかった。だって、最大のライバルがちかくにいるのに落ちついていられるほど私は大人でもないし恋にだって慣れていない。

「かえるのか栄美？」
龍輝が栄美さんの顔を見て言った。龍輝は自分の気持ちをはっきりとさせたあと龍輝はいままでとおなじように栄美さんにせっしている。栄美さんも龍輝とおなじようにこれまでどおりにせっしていて、なんだか二人の歴史を感じてもいた。龍輝は気づいていないようだけど、あの日の朝、栄美さんの目が少し赤くはれていたことをやよは気づいていた。それどもその日から何事もなかったようにふるまった栄美さんをやよはすごいと思った。自分の姿が見えていないのにやよは少し栄美さんと顔をあわせるのが気まずかったから。
「そうよ。目的もたっしたしね」
栄美さんの言葉に龍輝が黙ってしまった。栄美さんがわざと気まずくないようにふるまっていたから突然の反撃に龍輝はたじろいたような感じだ。なにも言わない龍輝におかしそうに笑いかけると栄美さんは言う。
「龍輝はどうせ明日、デートだからおくってくれなくていいわよ。一人でかえれるし」
栄美さんのその言葉に興味深げな視線をおくったのはお母さまとお婆さま。二人はチラチラと龍輝と栄美さんの顔を見てようすをうかがっている。龍輝は顔を真っ赤にしてさらに気まずそうだ。しまいにはうつむいて逃げるようにコップに口をつける。私は複雑な気持ちで二人を見ていた。
「栄美ちゃん、龍輝にふられたの」
突然なんでもないことのようにお母さまは言った。過剰に反応したのは栄美さんではなく龍輝と私だった。ぎょっとしてひやひやとした気持ちでいる私たちとちがい栄美さんは落ちついていてけろっとしている。そして、お母さまに何十年もまえの話しのようにおかしそうに言った。
「そうなのよ。龍輝もう彼女がいるんだって、おばさんをお母さんって呼べる自信があったのに、残念」
「女は恋をして大きくなっていくんだよ」

栄美さんの言葉にお婆さまがしみじみと言うとお母さまも納得したように腕を組んでうなずいている。栄美さんも考え深げな顔になっている。私もおなじようにその言葉を頭のなかでくりかえす。よくわからないでいるのは龍輝だけだったみたい。龍輝をのぞいたほかの四人はそれぞれ思いをめぐらしていた。その空気をこわすように言ったのは栄美さんだ。

「お祖母ちゃんもたくさん恋をしたの？」

「そりゃねえ、私もいろいろあったよ。いちばん思い出にのこってるのは源秀（げんしゅう）さん・・・・・・」

「やっぱり、女は恋をしなくちゃ。龍輝なんてしれてるからもっといい男をゲットしなきゃだめよ栄美ちゃん」

（源秀てだれ・・・・・息子のまえでしれてるなんて言うか）

龍輝は心のなかで思った。自分たちの恋の経験話しになったその場にいたためれなくて、やよに目で「うえにいく」と合図をおくったけど、やよも祖母ちゃんと母さんの話しを興味深げに聞いている。僕だけがのけ者にされたというか、話しのテンションにはいれない。どうして女はこういう風に話せるのだろうか。

「栄美ちゃん、ふられた相手よりいい男をつかむのが女のプライドよ」

「そうか、見つかるかな」

「大丈夫だよ。龍輝よりうえはいくらでもいるからね」

（祖母ちゃんまで）

龍輝は情けない気持ちで少しばかり泣きそうになった。やよの立場がないだろとどうじに思ったがやよはなんとも思っていないようだった。僕はそのことにも少しショックをうけた。やよはもう母さんたちの話しにすっかり夢中だ。男にはわからない話しばかりで僕はダウンして二階へ逃げていった。したからは楽しそうに話す母さんたちの声が聞こえる。そのまま、龍輝はベッドにたおれこむ。なんだか疲れて眠たかった。

何時間たったのか。あいかわらずあたりは暗くて窓からは星が見

えている。きれいだなと反射的に思わせる夜空に目を奪われてぼーとしていた。月は少し欠けていてでも、それでも圧倒的な存在感を保持している。月は夜の支配者なのだろう。月にまわりにいる星たちは遠慮がちに輝いていた。

「おきたの」

眠そうな目をこすって聞いてきたのは僕の隣りで寝ていたらしいやよだった。僕は闇に浮かぶ白くて愛おしい顔を見つめた。月が夜の支配者のように僕の支配者は間違いなくやよだった。やよは龍輝の胸に甘えるように顔をうずめる。やよの体温もやよのおもさもなにひとつ伝えてくることはないけれど、目に映るものは本物だった。僕は空気を抱くようにやよの背中に腕をまわした。

「話しはおわったの？」

「だってもう夜中ですもの」

「楽しかった？」

「ええ、とても。龍輝のお母さまやお婆さま楽しい人でうらやましい」

「どうせ僕はしれてるヤツだよ」

龍輝が拗ねたように言うのを聞いてやよはおかしくてくすくすと笑ってしまった。だってやよ自信、龍輝のことをていどがひくいなんて思ったことはない。龍輝は優しくてあたたかくて少しかわっているけどそれも龍輝のいいところでやよはとても好きなのだ。

「拗ねているの？」

やよにからかわれるように言われて龍輝はいっそう拗ねる。女の子にモテたこともないし義理チョコすらもらったこともないなと思うとよけいに拗ねた気持ちがむくむくと顔をだした。

「やよだってしれてる男はいやだろう。それにモテない男も」

やよいがよけいおかしそうに笑っているけど龍輝はつけくわえるようにいった。龍輝はやよの笑い声を聞きながら拗ねた気持ちをもてあましている。はっきりいって気分のよいものではない。やよに捨てられるかもという不安はないけれど気分はわるかった。

「ごねんね。だっておかしくて、どうしてそんな風にかんがえるの」
龍輝は答えない。どうしてなんてわからないけど考えたものはしかたない。やよがおきあがって僕の目を見る。僕はだるくなっていた腕をおろすとやよの不思議な目を見る。やよの目は黒くて大きくてすいこまれるような不思議な力をもっている。やよの目は僕をつかまえて離してくれない。
「龍輝はきっとモテるわ。だって優しくてあたたかくてちょっとかわっているけど、でも私が好きになった人だもの」
やよが自信ありげに言った。やよのその言葉に単純にも僕の拗ねた気持ちはどこかへ飛んでいく。自分がおかしくなるくらいやよの言葉は僕によくきく。機嫌のなおった僕は明日のことを考えた。栄美をおくったあと二人でどこにいこうか。映画館もいいしいつもみたいにただぶらぶらするだけでもいい。
「明日、映画でも見にいこうか。やよ見てみたいって言ってたやつがあるだろう。それでも見にいかない」
「明日は栄美さんのお見送りだけにしましょう」
僕がそう誘うとやよは少しあいだをおいてから僕に言った。僕にはそう言ったやよの気持ちがわからなかったけどやよがそうしたいと言うならそれでいいと思った。僕はやよに夢中でやよのことだけを考えていたかった。時間がないことも忘れるくらいにやよのことだけ考えたい。やよに気持ちがいけばいくほど僕は欲ばりになっていた。僕だけが覚えていればいいと思った思い出はやっぱりやよにも覚えていてほしい。具体的でなくてもあいまいにかすんでいてもかまわない。ただ、今度やよが生まれかわった時、出会ったらどこかで見たことあるかなぁ、ていどでいいのだ。こんなに自分が欲深いなんて思わなかったけど僕は望まずにはいられかった。
「私、ピアノが好きなの」
やよが言った。とつぜん言われて僕はやよがなにを言ったのかわからなくてあいまいにうなずく。やよは気にしたようすもなく話しをつづけた。僕はやよの話しをただ聞きつづけた。やよが忘れてい

ない一部分の記憶とともに聞かされる話し。やよが忘れていくやよの話しを聞いた。

「はじめて音楽にふれたのがピアノだったの。お母さまが弾くピアノを聴いて無条件で大好きになった。それから、練習して一曲を完全に弾けるようになったころお母さまが一台のピアノをくれたの。そのピアノは音も澄んでいてきれいで黒い体に薄い桃色の可憐な花が咲いていたの。ゆいいつお母さまが私にくれたのもだった気がする」

愛おしそうにピアノのことを話すやよからはそのピアノが大切でかけがえのないものだとわかる。僕ははじめて聞くやよの話しに夢中で耳をかたむける。僕が知らないやよの話し。やよの隣りに誰よりもちかくにいたそのピアノはやよにとって兄弟であり友達であり恋人だったのかもしれない。

「毎日、弾いていたわ。ピアノに触れない日なんてなかった。弾いているといやなことも忘れられたし楽しいことも何倍にもなるように感じたの」

「魔法のピアノだね」

「そうね」

僕の言った言葉にやよはうれしそうに言った。僕はやよにとって特別なそのピアノに少しやきもちをやいてしまう。やよが音楽を好きなのは知っていたけどピアノが好きなのは知らなかった。話してくれなかったのはそれだけピアノとの思い出が大切だったからだろうか。そう考えるといままで話してもらえなかったのが悔しかった。やよはそんな僕の気持ちをさっしたのか優しく僕のことを見ると言葉をつむいで言った。やよが懐かしいピアノからいまここにいる僕を見てくれたことになぜか心がじーんとしびれて苦しかった。

「龍輝に聞いてほしかったの。大事な大事なピアノとの思い出を・・・・・私は忘れてしまうから大切に思っていたこともなにもかも、だからいちばん大切な人にいちばん好きだったものを知ってほしかった。かわりに覚えていてくれる？」

消えてしまいそうなやよの声に不安になる。やよの不安が伝わってきて僕の心は苦しかった。苦しくて苦しくてでもやよはもっと苦しいにきまっている。僕が思うよりずっとずっと苦しいのだろう。

「覚えてるよ。やよのこともやよの大切なものもやよと過ごした日々のことも・・・・忘れられない」

少しでも不安をとりのぞいてあげたくて僕はやよに言葉をつむぐ。見せかけの言葉じゃなく心をこめた言葉だけど、やよの気持ちは楽になっただろうか。

「嘘つかないでね」

そう言って笑ったやよの顔に龍輝はほっとした。いつもそうだと思う。やよの不安や悲しみをとってあげたいと思っても、いつもやよが僕の心を救ってくれる。僕はやよになにもしてあげられないからできることをいつも探しているようだった。

「つけないよ」

そう言って、二人の目があえば自然と笑いがあふれた。二人でさんざん笑いあって、そして、疲れて手をかさねて寝た。やよの手の温もりもおもみも知らないけれど、手をかさねている安らぎが僕を不安から解放してくれる。

（やよもおなじだといいのにな）

僕は夢も見ずなにも考えず眠っていた。手から伝わる安らぎに僕は無条件の愛情を感じて、おなじくらいの愛情でかえしたくて、叶わない思いになにも考えていないのに自然と涙が溢れて流れていく。

僕は栄美といっしょに電車に乗っていた。もちろんやよもいっしょにいる。いっしょに見送りにきたのだ。栄美と並んで座っているとなんだか不思議な気がしてきた。栄美とやよがいっしょにいるのに僕はなんの気まずさも感じない。栄美に告白されてからはじめて三人だけになった。もちろん栄美にはやよは見えていないけれど、三人でいることに僕が気まずさを感じない。それは、やよもおなじようで穏やかな顔をしている。

「わたし、途中でおりてやよさんを見にいこうかな」
「え？」
栄美がとつぜん言いだしたことに僕はまぬけな返事をかえした。おかしそうに笑っている栄美に僕はどう答えていいのかわからなくてあたふたするばかりだ。
「うそよ。冗談、やよさんのことは見てみたいけど・・・ふられたばかりで見にいけるほどタフじゃないもの」
僕はそんな栄美の反応に苦笑いをかえした。僕とおなじ立場のはずのやよは栄美といっしょに笑っている。そんな二人に僕はおかしくなってしまう。僕は二人とおなじように笑っていた。女の子にはかなわない。考えてみると父さんだって母さんにはかなわないから男は女にかなわないようにできているのかもしれない。
車内に龍輝とやよがいつもおりる駅の名前が響きわたる。聞きとりにくい車掌の声とまる駅をつげている。僕たちはそのアナウンスを聞いて笑いおえると、栄美は少しはやめにたちあがり鞄をもってドアのまえにたった。僕も栄美のうしろにおなじようにしてたって栄美に言った。
「またこいよ。いつでもいいからさ」
僕は栄美にいつものように言葉をかけた。栄美もいつもとおり「うん、またくる」とかえしてきた。ドアが開いて僕はやよと電車からおりる。僕は少しどうしていいのかわからずそのまま栄美を見ていた。すると栄美が「ばいばい」と手をふってきた。その表情はいつもとおなじ笑顔で僕はおなじように「ばいばい」とかえす。
電車のドアがぷっしゅうと音をたてて閉まり、栄美を乗せたまま走りだす。栄美はいつものように僕の姿が見えなくなるまで手をふっていた。電車が見えなくなってもそのままホームにたっていた。やよもおなじように僕の隣りにたっている。言葉を交わさずしばらくそのまま二人でいた。
「やよ、やっぱりデートしよう」
とつぜん言いだした僕の言葉に少し怪訝な顔をしたけれど反対は

しなかった。もし、反対されていてもこの時の僕は強引にもやよをつれて歩いただろう。栄美とは永遠の別れではないけれどいま栄美と別れたように別れはあっというまなのだと思った。だから、予定をかえて僕はやよをデートに誘ったのだ。

僕たちは栄美と別れた後、予定をかえて町で買い物をしたり、アイスを食べたりいろいろなことをしてその日を楽しんだ。はじめは納得していなかったやよけれど時間がたつにつれて楽しそうに笑っていた。日も暮れて空が赤くなる頃、いっけんの楽器屋を見つけた。そこには驚くことにやよが話していたあのピアノがあったのだ。僕はもっとちかくで見たくてやよをつれて店のなかにはいった。

そのピアノにはやよが言ったとおり薄い桃色の花が咲いていた。黒によく映えて可憐に咲く花は想像していたよりもずっと上品で綺麗だった。僕はうれしくしかたない。やよのもっている思い出を共有しているような気がする。

「やよのいっていたピアノだよ」

僕の言葉にやよは不思議そうな目をむけた。そして、僕はやよの言葉に現実を思い知らされる。やよの生きていた時の思い出はやよだけのものだからなくなっていっても僕には実感がなかった。でも、

「なんのこと？」

僕は思い出をなくすことがどういうことなのか実感する。僕たち二人の思いでもこんな風に消えていくのかと思うといまさらながらに心が冷たくなった。そんな僕に気づかないでやよはピアノにそっと触れた。優しくピアノに触れて優しく懐かしそうな目をむける。

「あたたかなピアノ」

「え？」

僕はやよの言葉に驚く。綺麗なピアノではなく、やよはあたたかいという言葉をつかった。やよにとってこのピアノは楽しいとき悲しいときいつもいっしょにいた大切な存在だ。覚えてなくても心のどこかおくそこにひとしずくでもなにかのかたちで残っているのかもしれない。

「弾いてみますか？」
腰のまがったおじいさんが声をかけてきた。おじいさんはピアノの鍵盤を開けて紅い重厚な布をとりはらうと白と黒の鍵盤を見せてくれた。礼儀正しく並んでいる鍵盤は清涼な雰囲気と長い歴史をしめしている。
「でも・・・」
龍輝にはピアノなんて弾くことができない。どうしようか悩んでいると、おじいさんは驚くようなことを龍輝たちに言ってきた。
「お嬢さんも聞きたいでしょう？」
そう、おじいさんにはやよが見えるのだ。僕とやよは驚いておじいさんを見ているとおじいさんは年季がはいった穏やかな笑みを浮かべた。
「ちょっと、まってなさい。いま楽譜をもってきてあげるから」
そして、僕たちを残しておくに楽譜を探しにいってしまった。僕は驚いたけれど不思議とうれしくてやよに言う。
「見えてるのかな？」
うれしくて笑ってしまうとやよもおなじように笑っていて、うれしそうなやよの顔が部屋中を満たしていく。やよはピアノの鍵盤に触れる。
「龍輝、ピアノが弾けるの？」
「弾けるわけないだろ。やよが弾くんだよ」
「えっ、わたし弾けないわ。弾いたことないもの」
昨日の夜ほこらしそうに愛おしそうにこのピアノのことを話していたやよがそんなことを言う僕は切なくなった。そんな風にやよが言えば言うほど僕はやよの弾くこのピアノの音が聞きたくてしかたない。
「大丈夫、弾けるよ。やよの弾くピアノを聞かせてよ」
「だめよ、わたし楽譜だってよめないのよ。だいいちピアノに触れることもできない」
ピアノに触れられないと言われて僕は困った。たしかにやよは存

在するものに触れることはできない。でも、どうしてもやよのピアノが聞きたい。
「龍輝、ピアノに触れられないのに弾くことは無理でしょう」
やよが念をおすように言う。僕はどうしても聞きたくて考えこんだ。でも、いい案が浮かぶはずもなく。時間だけが過ぎる。
「これしかなかったが、どうかな？」
おじいさんが一冊の本を手にもってもどってきた。そして、おじいさんは楽譜を僕にてわたす。僕にてわたされてもどうしたらいいのだろう。僕のほうこそほんとうにピアノは弾けないし楽譜もよめない。
「・・・あの、弾けないんですけど」
僕が気まずそうに言うとおじいさんはきょとんとした目をして、また優しく笑いながら言う。
「お嬢さんが弾けるでしょう。見てみなさい」
そう言ってやよに楽譜を見るように言う。やよはその楽譜をみて不思議そうな顔をしてつぶやいた。
「よめるわ。わたし楽譜がすらすらよめる」
とまどいながらつむがれるやよの言葉を僕は聞いてうれしくなった。楽譜がよめたのだ。楽譜がよめるということは弾けるにきまっている。
「やよ、弾けるよ。よめるんだから絶対できるよ」
僕は興奮してやよに言った。そして、ハッと気づく。やよがいくら楽譜がよめても鍵盤に触れられなければ弾くことができない。
「・・・でも、弾けないね。触れることができないからしかたないけど」
残念そうに肩を落として言った僕をやよは気のしずんだ顔で見ている。僕はしまったと思ったけれどもうどうしようもなかった。そんな顔をさせたかったわけではない。そんな僕たちにおじいさんは言う。
「君がお嬢さんに指をかしてあげればいい」

「え？」
なにを言われているのかわからず僕は聞きかえした。そんな僕の腕をとってピアノのまえに座らせるとやよをてまねきする。やよもおじいさんがなにをしようとしているのかわからず、それでもおじいさんの言うとおり鍵盤におかれた僕の指に自分の指をかさねた。
「お嬢さん指をうごかしてごらん」
やよが指を動かしてみると僕の指もおなじように動いた。二人で驚いているとおじいさんは満足そうに微笑んでいった。
「さあ、お嬢さん聞かせてください」
やよはとまどってなかなかピアノの鍵盤に触れない。そんなやよの背中をあとおしするように僕は言う。やよのピアノが聞きたい一心だった。
「やよ、大丈夫だよ」
やよは鍵盤に目を落とすとゆっくりと鍵盤をおした。静かな店のなかに高く澄んだ音がひとつ響きわたる。その音は学校においてあるピアノの音よりもっと柔らかくもっと透明に響きわたっているように聞こえた。もちろんピアノにくわしいわけではないけれど、いままで聞いていたものとは違うことだけはわかった。
（なにを弾くんだろう）
と思いながらやよの横顔を見つめる。やよの顔はほんとうに穏やかだった。あまりにも穏やかな顔をするから、僕はその横顔にいつくしみすら感じてしまった。
楽譜も開かずやよはピアノの音を鳴らしはじめる。やみくもに音を鳴らしていたやよのピアノがしっかりとしたリズムをきざみだす。僕には聞いたこともない曲だった。だから、曲名も誰が作曲したのかも知らない。やよはとまどいも焦りも不安も感じさせず迷わず鍵盤をたたいていく。
けっして明るいテンポのよい曲ではなかったけれど、でも静かで神秘的な曲だった。やよの奏でるその曲ははじめてやよを見たときの印象そのままの曲だ。彼女とおなじ神秘的で物静かで安心をあた

える曲だった。
　どれぐらいやよはその曲を弾いていたのだろうか。曲がおわりそっとピアノから手を離したやよは泣いていた。静かにゆっくりと流れ落ちる涙の美しさに僕は言葉がつまる。僕にはわからないけどやよとピアノのあいだにはなにか特別なもので繋がっていて離れることはないのだろうと思う。
　そして、僕たちはおじいさんにお礼を言って家路についた。かえるころにはもう日は完全に沈んで地の静寂さと天のにぎわいがとうぜんのようにあたりを包みこんでいる。そして、夜の主役である白く輝く月が僕たちを見おろしていた。
「きれいな月夜ね」
　やよは呟く。僕もおなじように足をとめて空を見あげる。月は太陽の輝きをうけて僕たちの足元に影をおとしている。
「ああ」
　僕たちはもうそれ以外なにも言わない。いう必要がなかったのかもしれない。やよが弾いたあの曲はこの月のようだったと僕は月を見ながら思った。いままで聞いたことのなかったあの曲は僕の心に深く染みてきえないあざになるのだろうと僕はかんじた。ふとしたときにやよの姿ごとこの曲を思い出すのだろうと。

　やよの記憶はもうないにひとしい。ゆいいつ残されているものはやよという名だけだった。僕は頻繁にやよの名を呼んだ。やよが眠りにつくとき、やよが眠りから覚めるとき必ず「やよ」と名を呼ぶ。「やよ、おはよう」「やよ、おやすみ」僕は願うような気持ちでやよの名を呼んでいた。少しでもやよがここにとどまっていてくれるように。別れの時がすこしでも遅くなるように僕はやよの名を呼びつづける。二人ですこしでも時間を共有していたくて僕は母さんたちをおいだしたくらいだ。
「やよ、おはよう」
　目覚めたやよに僕は言葉をかける。いつもはにっこりと笑って「

おはよう」と言ってくれるやよだが、今日はようすが違う。なにも言わず表情も動かない龍輝は不安になって何度もやよの名を呼んだ。
「やよ」
何度か龍輝が呼ぶとやよは自分の名を呟く。そして、僕はそんなやよにたしかめるように声をかけた。不安で声が震えていてもかまわなかった。
「君の名前はやよだよ」
「大丈夫よ」
やよはそう言うとやさしく微笑んだ。僕を安心させるように微笑んだのだろうけど龍輝を安心させるその魔法はもうきかなかった。やよはもうすぐいなくなる。のこされた時間はもうわずかしかないのだ。二人の記憶すらなくしてしまうその時がもうきているのだ。
「お腹すかない？」
そう言うとやよは部屋をでていってしまう。龍輝もやよのあとを追いかけてしたへとむかった。やよが一瞬でも僕のまえからいなくなることが不安で僕はやよを必死に追いかけた。やよの姿を見失わないように、やよがとつぜん僕のまえから消えないように。

僕はやよをつれてはじまりの場所にきていた。二人のはじまりの場所。清らかにさやさやと流れていく水が夏の暑さをやわらげるその場所に。龍輝は水のなかにはいると手をさしのべてやよを呼んだ。
「やよ」
水の心地いい冷たさが火照った体から熱をうばう。やよは僕の手に自分の手をかさねるとふわっと水のなかにはいってくる。やよと龍輝はたがいの目を見たまま水のなかにはいっていった。海のようにきれいで派手な魚はいないけれど小さくて可愛らしい魚やそこそこの大きさの魚もいてこれはこれで楽しい。僕たちはこんな風にひとしきり泳いで遊んだ。
てきどに疲れた体を夕日がオレンジ色に照らす時刻、岩のうえで二人でよりそいながら昼から夜へと姿をかえる美しい色の変化を見

ていた。やよが僕の肩に頭をちょこんとのせてほとんど沈んでいる夕日を見ていた。僕の肩にやよの頭のおもさは伝わらないけどこんな風に二人でいられるだけでいい。だから、時間がとめればいいと思った。このさきなにも望まないしこれいじょう望むものはないから時間をとめてくれ。

オレンジ色が完全に消えて少しうすめの紺色があたりを支配したころ、やよは僕に言った。

「わたしの名前を呼んで」

僕は言われたとおりやよの名を呼ぶ。やよを呼ぶ声に願いをこめながら。

「やよ」

「私、自分の名前ももうわからないのよ」

「うん、知ってる」

悪戯を告白するように言ったやよに僕はなんでもないふりをして言った。やよが自分の名を失ってしまったことを僕はあの時に気づいていた。やよが僕を安心させようと笑うから僕はなにも言えなかった。言いたいことがたくさんあるのに伝えられないもどかしさややよのすべてを知りたいのにわからない苦しさそんな思いが僕をしめる。

「私もういなくなるのね」

やよは静かにそう言うとなにも言わなくなる。二人で覚悟してきた。こんな時を迎えることは知っていたから、でもいざきてしまうと怖気づいたのかもしれない。離れることを覚悟したはずなのに時がちかづけばちかづくほど離れたくない思いが胸をかきみだす。

「やよ」

僕は何度でも名を呼んだ。言えない願いを名前にかえて僕は何度でもやよの名を呼ぶ。やよの名に思いをすべてのせるように言う。やよは名前を呼ばれるほどに龍輝から離れたくなくなった。どんなことをしても龍輝のそばにいたかった、閉じこめようとした思いの扉を開かれる。どうして、私は龍輝と離れなければいけないのだろ

うか。どうして、龍輝をこんなに思っているのに叶わないのだろうか。龍輝が自分を呼ぶ声が愛おしい思いを運んできてやよは耐えられない。

「やよ、私この名が好きよ。龍輝が呼んでくれるから好き。名前を呼ばれるたびに龍輝に触れているようでとっても好きよ」

僕とむかいあってそんなことを言うやよのすべてを知りたくて僕はやよから目がはなせなかった。やよはいまどんな気持ちで僕の声を聞いてどんな気持ちで僕を見ているのだろうか。「やよ」と呼ぶこの言葉にこめた思いをやよはわかってくれているのだろうか。この言葉にこめた僕の願いも伝えきれないやよへの思いもどれだけ伝わっているのだろうか。

「僕の名前も呼んで、やよに触れられたいから」

やよはうれしそうに笑うと僕の名前を呼んだ。何度も何度も大切そうに丁寧に発音して呼んでくれるやよに龍輝はやよの思いを感じる。二人の互いを思う気持ちはおなじくらいの熱量をもっていて、互いの心を満たしながらしめつける。

やよもまた龍輝の名に自分の思いをこめた。自分の名を忘れてしまったけれど、もうすぐ龍輝のことも忘れてしまうけれど、いまここにある自分の思いをかたちにするように龍輝にのこるように言う。

手を繋ぐこともお互いの熱を感じることもできない龍輝とやよは互いの名を呼びあうことで触れあっていた。いままでだって声を聞いて言葉を交わしてその時の思いを共有することで二人は触れあってきたのだから。

「ほたる？」

「龍輝、お別れよ」

あたりに蛍のような光りがぽつりぽつりとあらわれてだんだんとその数をましていく。黄色なのか緑なのかよくわからないその光は小さくて淡い光りをはなちながら神秘的にやよと龍輝をてらして別れを告げるように輝く。

「そう。忘れないよ」

僕はやよを心配させないように寂しさや悲しさを必死にかくして言った。別れは覚悟していただろと何度も何度も言い聞かせながら僕はやよに別れを告げようと必死になるのに、言葉も満足にでてこない。

龍輝が私に心配をかけないように思いを必死に隠そうとしていることに私は切なくてしかたなかった。だからよけいに私も思いをぶつけてはいけない気がした。離れたくないと龍輝にすがりついてしまいたかった。

「龍輝、私を思い出にしてね。私にこだわらないで、もっと素敵な人に会えるように祈っているから。だから、いまは名前をよんで」

互いを思いあって自分の思いをさらけだせないのなら、せめて名前に思いをたくしたかった。好きだから離れたくないというあたりまえの思いを誤魔化すのはつらすぎるけど、どうすることもできなかった。

「やよ」

龍輝はまっすぐにやよの目をみて言った。何度も名前を呼ぶ。やよの細い肩が震えているように感じて抱きしめてあげたかったけど、僕たちにはぬくもりをあたえあうことさえ許されてはいない。思いを泣きあいながら別れに震えることもしてはいけないような気がした。好きな人のために自分をころしてただ名を呼ぶのはなんて辛くて苦しいことなのだろうか。苦しい思いが溢れて零れ落ちないように声が震えてしまわないように僕は必死だった。

やよをつれさってしまう光が溢れて満ちていく。やよの姿がうすらいでいくことに僕はとうとう耐えられなくなった。溢れて流れ落ちる思いをとめるすべもなく、苦しさと儚い願いは胸からこぼれるばかりだった。よやを心配させてしまうと思ったけれどとめることは叶わなくて。

「もう、ほんとうにお別れなのね」

やよは透けていく自分の両手を見て言った。いまにも消えてしまいそうな自分の体がやよは悲しくてたまらない。この体がすべてな

くなったら私は龍輝のことを忘れてしまう。なにもかも忘れて新しい命を生きていくのだ。こんな悲しい思いをしてまで新しい命をいきて生きたいわけではない。忘れるとしてもいまは悲しすぎるから。
やよが言った言葉は僕の心をえぐりとるように響いて僕は思わずやよを抱きしめる。やよのたよりない背中に腕をまわしてしっかりと抱きしめる。いままで感じることのなかったやよのぬくもりや体のおもみを感じて僕はいっそう涙を流す。
とつぜんの龍輝の行動に驚いたけれど、龍輝のぬくもりがやよの虚勢をはがしていく。龍輝の胸に顔をうずめてやよも涙を流した。龍輝のおもさもあたたかさもなにもかもを伝えてくる。触れあった肌から隠しきれない思いが溢れて言葉にしようとしたとき龍輝は言葉をつむいだ。自分とおなじ思いを。
「消えないで、離れられない」
龍輝の言葉にやよの思いが溢れてとまらなくて、思いを言葉にしないとつぶれてしまいそうで、でも怖くてあらわせない苦しさがやよを支配する。言葉にしたいのに涙に濡れた声では思うようにつむげない。
「わたし、そばにいたいの。龍輝のそばがいい」
「僕のそばにいて、ずっとずっと忘れないで」
やよの思いにこたえたくて僕は自分の思いをつむいだ。言葉ではもどかしくてどれほど伝わるのかわからないでも、言葉にしないといけないように思えて必死に言葉にした。
「思い出なんかにしないで、だれも見ないで」
（私だけを見ていて）
こんな風に龍輝をしばってはいけないと思うのにとめられない。生まれかわっても会えるとは限らないし、会えたとしても年齢が離れすぎている。龍輝を苦しめるだけだと思ったからいままで本心とは逆のことを言いつづけてきたのに。
「やよ以外なんて考えられないから、見つけるから」
「りゅうき」

龍輝の胸をかるくおして龍輝の目を見つめる。龍輝もおなじように涙で濡れていてまっすぐに私を見ていてくれた。いまだけでも誓うように言われた言葉がうれしい。でも、欲深いからいまだけではたりなくて私は龍輝に魔法をかける。

龍輝のほほに触れるとうっすらと目をとじながら唇をよせた。こんな大胆なことができるなんて思わなかったけど、龍輝をしばりたかった。唇で魔法をかけて私いじょうの人があらわれないように龍輝が私を見つけられるようにそんな願いをこめて口づける。

はじめはなにをされているのかわからなかった。ふっくらとした柔らかな感触と熱い唇の感覚を自覚すれば自然とやよをひきよせていた。やよとおなじようにゆっくりと目を閉じて涙をながした。

このまま時がとまるのなら僕はなんでもする。神様をころしたってかまわない。そんな風に思いながら唇をあわせたままつめたい涙をとめることはできなかった。

やよの姿がうすらいで光りは溢れて龍輝の腕から消えていく。やよのぬくもりもおもさもなくした腕に空虚を感じて龍輝はうずくまって泣いていた。空が白さをとりもどして赤く黄色い太陽が顔をだして僕をなぐさめてくれたけれど泣きやむことはできなかった。ぽっかりとあいた穴をうめるように僕は泣きつづけた。

あれから二十年すぎた。俺はやよという穴をうめるようにいろんな子とつきあった。でも、心にやよがいる状態ではつづきはせず、いつも彼女たちにふられるばかりだ。しかし、ふられても少しも痛みはしない心を俺は不誠実だと思うけれど、しかたがないとも思う。

この二十年、彼女を思い出にすることすら俺にはできなかったのだろう。どこかで彼女を求めている気持ちを隠そうとした時もあったくれど、どうすることもできずに二十年間もてあそんで彼女のか

わりを必死に探しつづけてきた。それがふられつづけた理由だろう。彼女だけが特別なのだ。俺はあの時の約束をいまだに守りつづけているのかもしれない。つきあう子達はどこかやよに似ていたと思うから。

ふとしたときに彼女を思い出しては、瞼にはっきりと彼女を思い浮かべていた。夏の日ざしが降りそそぐ町並みを見ると、きらきらと目を輝かせて楽しそうに町を歩いていくやよの姿がうかんだ。川のせせらぎを聞けばやよの澄んだ歌声が聞こえてくるような気がしいた。星や月が輝く夜にはただ一度、触れた彼女のぬくもりが体を支配した。

夏がくると俺は必ず考える。やよはいま何歳なんだろう。どこにいるのだろう。俺には見つけることができるだろうか。まいとし夏がくると考えてしまう。やよを思うことを俺はやめられなかった。彼女は生きているのだ。新しい命をうけて、新しい思い出とともにそう思うとどうしてもあきらめられない気持ちになってしまう。もし、会えたとしても二十年ちかくもはなれた彼女に俺はどう声をかければいいのか、と考えたけれども、彼女を無意識のうちに探すことはやめられなかった。

秋がきて冬になり、春が目を覚まして夏を呼ぶとそれとおなじように俺の心に思い出が鮮やかに浮かぶ。夏はどうしても彼女を思い出させて忘れさせない。そばで笑って泣いていた彼女を愛おしいと思っていた自分ごと思い出すのだ。彼女いじょうの人があらわれたら思い出になってもう追わなくてすむのだろうか。そんなことを考えながら眠りにつく日もあった。仕事に疲れると触れられない彼女の手をにぎって眠っていたあの夜を思い出す。

俺はがむしゃらに働いたお金でピアノを買った。母さんたちは「弾けもしないのにそんなものあってもどうするの」と言ったが、俺はピアノを購入した。眠れない夜、苦しくて悲しい時、特別な日にはその真っ白い花の咲くピアノの音を聞いた。弾けるようになりたいと思ったが、忙しくて時間もなく習いにいくことは叶わなかった。

でも、もし習いにいっていても弾けるようになっていたかな。
俺は真っ白い花が咲いたピアノのまえに座りながら、ワインを飲んだ。月明かりがピアノに降りそそいでよりいっそうピアノの存在感をましている。神聖な夜のなか俺は弾けもしないピアノに指を落とす。てきとうに指を動かしピアノの音に聞きいる。
（ちゃんと弾けたらいいのにな）
と思いながら俺はいまも昔もかわらないその音色に聞きいっていた。ピアノのうえには大きなウサギのぬいぐるみが座っている。ウサギのぬいぐるみにも月の光が当たっていてきらきらと輝いている。やよがほしいとねだったこのウサギのぬいぐるみは俺といっしょにやよのいなくなった二十年を過ごしてきた。ワインとピアノに酔いながら俺は明日のことを考える。明日は忘れられない日になるだろう。そんな神聖な夜の余韻を抱きしめて俺は眠りについた。満たされた思いと走馬燈のように駆けめぐるやよへの思い。
（明日、晴れればいいな）
俺は天気予報も見ずにベッドへはいると酔いのまわった心地いい体とともに深い眠りにつく。願いが叶うその時をきよらかな気持ちでまつ。月の光りとピアノの音に身を清められたように思い。そして、朝の光りをまつ思いはうれしくてわくわくした。

ワインのおかげでなんとかぐっすり眠ることができた俺は清らかで生き生きとした緑にかこまれた教会にいた。空はどこまでも澄んでいてきれいな青だけが空を自由にいききしている。朝日もひかえめに降りそそぎ心地よい朝だった。
俺は準備をおえるとはやる気持ちをもてあましながら教会の控え室でまった。きれいな空を窓ごしで見ると神様や宇宙にまで祝福されているような気がしてうれしくてしかたない。俺はこの時をどんなにまちつづけただろうか。俺の願いがこんな風に叶うなんて考えられなかった。どんなに辛いこともこの日へとつづく道であったなら、俺はその辛い日々にすら感謝をしている。

そう、俺は結婚するのだ。やよを思いつづけた二十年に終止符をうつ。やよを思いつづける日々が今日おわりを告げて新しい日々がはじめる。満たされた悲しみのない日々だと空も告げるように輝きながら二人の門出を祝ってくれている。やよを思いつづける二十年は僕に優しさと切なさを残し時間をとめた。そして、彼女に会った時とまったはずの時間が動きだし加速度をつけて未来へと走っていく。

そんなスタートの日、俺はまだ仕度がおわらないパートナーに思いをめぐらす。そして、まちきれなくなった俺は係りの人をつかまえた。あせる気持ちを隠しもせずに言った俺の言葉に微笑みながら、少し年配の女性が言いながら案内してくれる。

「花嫁様はついさっきご仕度ととのいましたよ」

俺はだれよりもはやく彼女の姿が見たくていそいで彼女のもとへいく。愛おしい人の純白の姿がきれいじゃないわけがない。

「どうしたの？そんなに慌てて」

慌ててはいってきた俺に彼女は笑いながら言った。きれいにメイクをして白くふんわりとした白いドレスに身をつつみ明るく幸せそうなブーケを手にもった彼女がいた。そのあまりにもきれいな姿に僕は言葉をなくし、動けなくなっていた。そんな、俺に悪戯に微笑むと彼女は言う。

「どう？きれいになった」

「ああ」

俺はどう言っていいのかわからず曖昧にかえすと彼女は不服そうにふくれてしまった。俺は慌てて言葉をつぎたしていく。

「きれいだよ。思わず見とれたくらい」

彼女はその言葉に満足そうに微笑む。その笑顔に少年の時のようにドキドキと心臓が踊りだす。はじめて恋した時のように新鮮な感じとどこか恥ずかしい気持ちを感じて俺はどうしたらいいのかわからない。年甲斐もなく真っ赤になっている俺に彼女はからかうように言う。

「真っ赤だよ」
俺はいたたまれなくて彼女から顔を背ける。背中ごしに彼女は「顔、見せて」と強制してきたけど俺はかたくなに拒み続けた。こんな風にじゃれあっていると年配のスーツをきた女性が部屋にはいってきてみじかく告げた。
「お時間です」
俺は愛しい花嫁に手をさしのべる。幸せで心がいっぱいではちきれそうな思いで彼女を呼んだ。俺の幸せな気持ちと彼女への思いをこめて彼女の名前を呼ぶ。俺を未来永劫、幸せにしてくれるその人の名を。
「夜世（やよ）」

生と死がひき離したとしてもまた逢いたい人がいた。そばにいることだけを願った人がいた。離れることは苦しくてうばわれることが怖かった。大切な人がそばにいてくれるならたくさんの言葉をかけよう。愛の言葉、感謝の言葉、たわいない挨拶、気づかう言葉、たくさんの言葉を毎日かけつづけよう。大切な人が僕のそばにいつづけるかぎり。二人の未来がつづいていくかぎり。こくこくと刻む時のように幸せをひとつひとつつみあげていこう。ふたたび生と死が二人を別つとしても僕はふたたびその人を探しだすだろう。その人しか僕は望めないから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8006c/

夜を想うときは・・・

2010年10月8日15時45分発行